

早稲田大学本庄高等学院
2021年度 学校自己評価・関係者評価

2022.3.31
早稲田大学本庄高等学院

0. コロナ禍における2021年度学校運営

2021年度は、2020年度に続き、新型コロナウイルス感染状況に翻弄された年度となった。感染状況は、2020年に比べ比較にならないほど悪化したが（例えば、政府により全国小中高の一斉休校の要請が突然発出された2020年2月28日の全国の感染者数は17名であるが、2022年3月現在では1日の感染者が2万人を超えることは珍しくない）、「得体の知れないウイルス」として闇雲に恐れていた2020年度と異なり、今年度はwithコロナに社会のスタンスがシフトした。

本校では、2020年度卒業式を2分割・生徒のみの対面で実施し、2021年度入学式も生徒のみの対面で実施した。概ね授業は分散せずに通常登校とする努力を行ったが、定期テストに関しては、滞りなく実施したいため、直前の1週間をオンライン授業とする配慮を行った。学校行事は軒並み中止か縮小を余儀なくされた。文化祭である稲稜祭は、昨年はオンラインで実施したが、今年度は一部ステージで、対面で行うハイブリッド方式で実施した。春の体育祭は延期、規模を大幅に縮小し、秋に実施した。修学旅行・遠足は中止となった。

生徒生活にも注意を払わざるを得なかった。特に、部活動は、県からの指針が感染状況によってその都度変わるため、頻繁にそのガイドラインを変えざるを得なかった。対面の国際交流はまったく実施できないが、代わりにオンライン交流の数が増えた。食事の際の感染危険が指摘されているところから、食堂にはパーティションを設置し、座席を1/3に減らした。教室にもパーティションを設置していたが、圧迫感や板書の見えづらさなどから、2学期には撤去した。

一方で、昨年度のオンラインコンテンツやノウハウをうまく利用することによる新しい動きも見えてきた。対面の授業とオンラインコンテンツを併用することにより、授業がわかりやすくなる、復習しやすくなる、さらには欠席した生徒に役立つことにつながる。学校説明会では、オンラインであればわざわざ来て参加する必要がないため、海外の受験生も含め、大幅に参加者が増加した。一方で説明会に気軽に参加できるため、説明会に参加した中でどのくらいの受験生が実際に受験するのか、予測がしにくくなった側面もある。また、実際にキャンパスを訪問しないまま入学してしまうことが、学校選択のミスマッチにつながる懸念もある。

キャリア講座や課外講義の一部を夜にオンラインで実施することにより、生徒のみならず保護者もコロナ以前には参加できなかったプログラムに参加できるようになった。このことは、保護者の学校理解につながっている。このようなコロナ禍で得たオンラインコンテンツやノウハウを活かすことにより、ポストコロナにおける次世代の学校運営につながるものと考えられる。

しかし、その一方で、この間に失われているものは、計り知れないほど大きい。教育現場で失われたものは、お金という数字のように目に見える形になりにくい。社会がその問題を認識しにくいことが、この問題をさらに大きくしている。例えば、この2年間における宿泊を伴う合宿や研修活動は皆無である。このことから団体活動経験の欠落が予想される。また、ほとんどの行事が中止あるいは規模縮小を余儀なくされているため、生徒主体で実施する伝統が途切れてしまっている。コロナ禍以前はその活動の中で培われたであろう、協働作業意識やリーダーシップ養成が恐らくできていないと予想される。

思春期という多感な時期に、本来は獲得してほしい重要な経験が日本全国的に欠落してしまっている反動は、いずれどのような形で現れるのか、私たちは注意を払わなくてはならない。

1. 教育理念・目的・人材育成像

早稲田大学は早稲田大学教旨に示された3つの建学の理念、すなわち「学問の独立」「学問の活用」「模範国民の造就」に基づき、教育・研究を展開している。その上に、2000年に「21世紀の教育研究グランドデザイン」を発表し、08年には創立125周年を契機に「Waseda Next 125」を策定して「早稲田から WASEDA へ」をスローガンに定めて広く世界で活躍する人材の育成に努め、グローバルユニバーシティを目指すこととした。さらに、創立150周年を展望した「Waseda Vision 150」を12年11月に策定し、「アジアのリーディングユニバーシティ」とし

て世界に貢献する大学であり続けるためのビジョンを社会に公表し、目指す方向性を明らかにしている。

早稲田大学本庄高等学院（以下本庄学院と略）は早稲田大学創立 100 周年を記念して 1982 年に男子校として開校した。2007 年に男女共学となり、2012 年に現在の校舎に移転した。全国各地および世界各国から、将来早稲田大学を目指す意欲的な生徒を集め、自由と自立の校風の中「自ら学び、自ら問う」という教育方針のもとで「進取の精神」に満ちた活力ある生徒を育てることを教育の基本としてきた。

加えて、「Waseda Vision 150」に関連し、2012 年 11 月、「本庄高等学院の将来構想」を発表した。すなわち地域の特色を生かした「森に想い土に親しむ」教育をいっそう発展させた、教科横断型の教育・研究活動を通して、社会の各分野で活躍できるリーダーを育成することを目的としている。

本学院は早稲田大学での一貫した教育体系の中に位置づけられ、卒業生全員が早稲田大学の各学部に進学すると規定されている。したがって本学院の目的は、早稲田大学教旨、「Waseda Vision 150」、そして「本庄高等学院の将来構想」に基づいた教育・研究活動を行なうことである。生徒に対しては、知的関心を高め論理的な思考力、豊かな感性を育成し、さらに大学における専門的な学問の分野も模索させ、また大学での幅広い本格的な学問研究に必要な、基本的な学力・体力を養成することを目指している。その目的は本年度においても継承されている。

2. 教育活動

2.1 授業

2.1.1 授業運営

本年度もコロナ禍の中、授業展開に際しては昨年の経験を活かし、オンライン授業や短縮授業を適宜導入し、学力を保证するための施策を実施した。また、コロナ感染等で登校できない生徒には、教科担当者ができる限りの学習指導を行い、学力低下を防ぐ努力をした。

（ア）国語

オンライン授業時には、Zoom¹を用いたリアルタイムでの授業の中継や、教員が作成した資料によるオンデマンド動画の配信などを行うことにより、対面授業時とほぼ遜色ない内容の授業を行うことができた。対面授業時においても、なるべく PC、iPad、書画カメラ等のデジタル機器を用いた授業の取り組みや、早めの資料配付・Moodle²での生徒との資料データの共有といった準備を行うことで、速やかなオンライン授業への切り替えが可能ないように努力した。

オンライン授業の充実と共に、昨年度ほぼ実施できなかった対面授業での音読や発表について、教員が細心の注意を払いながら実施し、対面ならではの授業を体験させることに努めた。また、生徒の学習への興味を拡充し、大学への学びへ繋げるよう、外部講師（早稲田大学非常勤講師）による研究授業を行った。

（イ）数学

オンライン授業においては、黒板をリアルタイムで写し授業を行なうことで、通常の対面授業と遜色ない授業を展開することができた。

また、オンライン授業の補填として、今年度から新たに自学自習 LA の制度を導入し、学年末試験 2 週間前から大学生による質問対応の時間を毎日設け、手厚いフォローを行なった。

（ウ）理科

理科の実験実習においては共同作業、ディスカッションが不可欠であるため、実験室入室時に手指の消毒を徹底し、マスク着用の上で換気しながらの実施とした。また実験器具も共用のものであるため、各クラス終了後のこまめな消毒を心掛けた。オンライン授業の際は授業担当者が書

¹ オンライン会議システムのサービスとしては CiscoWebex、Microsoft Teams、Collaborate などもあるが、本校では基本的に Zoom を用いている。

² 早稲田大学の Learning Management System (LMS)

画カメラを用いて演示実験をすることで、文字媒体一辺倒の授業とならないよう工夫した。

（エ）地歴公民

3 年次選択科目を中心にディスカッション主体の講座を数多く設置・展開している。オンラインの短縮授業への切り替えに随時対応できるよう、**2021** 年度は発表・提言資料の添削・提出および受講者による閲覧の早期化、質問・意見の事前集約を図った。これにより、オンライン授業の回でも冒頭から意見交換をおこない、受講者の発言機会と考慮時間を十分確保しながら、討議から総括までをおおむねスムーズに進めることができた。

（オ）英語

3 年間を通じ、スピーチやプレゼンテーションをはじめ自分の考えを相手に伝える機会を適宜設けている。生活様式の変化対応が求められる今年度もパーティションの設置、マスク着用、手の消毒など感染防止に努めながら相手に伝える活動を実施した。なお、オンライン授業やコロナ感染等で登校できない生徒に対応するため、**Zoom** を利用したオンライン発表に切り替えたりするなどの対策を講じた。

（カ）保健体育

本庄高等学院の有する体育施設をフル活用し、年間を通じて様々な種目に取り組んだ。通常授業では、授業前後の消毒や手洗いうがいを徹底して授業を展開した。オンライン授業期間中に基礎技術習得のための動画を提示し、実技実施時につなげる形で効果的に授業展開を実現できた。コロナ禍の影響で生徒の体力低下が懸念され、運動強度の設定に注意しながらの授業を展開することがこれまで以上に求められた。授業中のケガが例年にくらべ多くなってしまったことが反省すべき点である。運動時にもマスクの着用を推奨していたが、サッカーなど運動強度が上がる種目では息苦しさから、マスクを外す場面も多くみられ、感染予防と実技授業の両立の難しさ本年度も実感した。

（キ）芸術

芸術科の科目は実技教科の一つであり、特に対面による教員と生徒・生徒同士のやり取りが行われることで、授業はより活発になり充実した内容となる。**2021** 年度は前年度に比べて、対面での授業回数を一定程度確保することができたため、授業後のアンケートでも、「一般教科の学習に追われる最中、とても良い息抜きの時間になった」と回答している生徒が多数居り、学院生の充実した日々に参加できていたことがうかがえる。

オンラインになった際の対応は、音楽は授業動画の視聴、美術および書道は自宅での課題制作を課すこととした。以下に、音楽Ⅰでの対応を記載する。

音楽Ⅰでは、**2020** 年度に引き続き、オンラインでの音楽教養講座「ドレミの不思議」と題した講座（全四回）を提供し、音楽において当たり前のように扱われる単語や言い回しについて、そのルーツを探りながら学習する動画（各回約 30 分）を作成し、生徒にオンデマンド配信を行った。また、2 学期に取り組んだコード学習の特別編として、弾き語りや楽曲制作のコツについてレクチャーした動画を作成し、オンデマンド配信を行った。

内容としては専門的な知識も含まれたため、授業後に行ったアンケートには、内容について難しく感じた生徒も多かったようだが、音楽と他教科（数学、歴史、地理、語学）がたくさんリンクしたことに驚き、魅力を感じた生徒が圧倒的に多く、初学者でも楽しめたという声が寄せられた。

なお、対面での音楽Ⅰの授業は、1 学期には様々な名曲の歌唱、打楽器アンサンブル、ハンドベル合奏に取り組み、2 学期には旋律譜に記されるアルファベット（コード記号）の解読の仕方を細かくレクチャーした上で、グループ活動・演奏発表を行った。各班で選んだ楽曲の一部分を、旋律担当・伴奏担当に分かれて、オリジナルの合奏を行った。班の分け方が、くじ引きによる男女混合の組み合わせだったため、そのことがクラス内の交流を図る良い機会になったことも、多く触れられていた。3 学期は、個人・グループによる演奏発表を行い、色とりどりの発表が連続したことで、生徒たちも大満足のものであった。

本庄高等学院は、クラス単位で音楽Ⅰと美術Ⅰを履修できるため、グループワークを中心にすることで自然とクラス内の交流が図られ、一致団結する機会が非常に多く生まれる。生徒たちもそのことを非常に強く実感したようで、高等教育ならびに本庄高等学院における芸術科の学びの意義を大きく見出す一年となった。

(ク) 家庭

家庭科では、調理実習の実施に苦勞した。3年生の選択食文化は少人数授業(20名)であったため、生徒同士の距離をとった調理、パーティションを立てた試食をさせることができた。それでも調理の行程を例年の半分程度にする必要があった。1年生の1年生の必修授業は予定していた実習5回のうち2回しか実施できなかった。実習以外にも、特に家族・家庭生活に関する分野の学びでは生徒たちのディスカッションの実施に苦勞した。

家庭科は、学びを深めるために多様な価値観に触れることが欠かせない。コロナ禍で、教科書の内容を一人で学んで知識を積み上げることに偏った学びとなった。

(ケ) 情報

2020年度は年間の約半分がオンライン授業となったが、2021年度は概ね対面の授業で乗り越えることができた。

本校の情報科の授業の特色として、座学をせず毎時間実習が行われることが上げられる。その意味で、オンライン授業ではPCやソフトウェアの具体的な操作について、わかりやすく指示をすることが難しく、生徒にとっても質問しにくいと、新しいソフトウェアやインストール作業において大きな困難があった。今年度は、その点が解消されたため、昨年度よりも負担感が少なかった。

大学各学部から要望の多かった統計解析言語Rを2年生の「情報の科学」に導入した。次年度は1年生に対して新教育課程「情報Ⅰ」を実施することになるが、そこでもプログラミング言語としてRを実施することとなっている。

情報科の特徴として他校と異なる大きな側面は、本校の特色である探究活動(卒業論文)と有機的な連携を図るため、アカデミックリテラシー養成およびプレゼンテーションスキル養成に関する内容を強調していることである。

2.1.2 必修科目・選択科目

(ア) カリキュラム

カリキュラムは1年次から3年次まで、各年度32単位構成で3ヵ年96単位となっている。

- ・ 1年次：芸術科目を音楽履修クラスと美術履修クラスに分け、その他の必修科目は共通に履修する。
- ・ 2年次：ゆるやかな文理選択分けを実施している。文系は古典(2単位)を選択し、理系は物理(1単位)および科学課題研究(1単位)を履修する。また、数学(3単位)は、文系は経済や商学部で必須とされている内容を、理系は理工学部での学習の基礎となる内容を扱っている。
- ・ 3年次：32単位の構成は、文理共通科目(15単位)、必修選択科目(12単位)、自由選択科目(2単位)、総合的な探究の時間(2単位)、HR(1単位)となっている。文系と理系では、必修選択について科目および科目数が異なる。文系は66科目12単位、理系は4科目12単位である。また「総合的な探究の時間」は、キャンパスに素材を求めた半期ごとの輪講形式の「大久保山学」(1単位)と、「卒業論文指導」及び「修学旅行事前学習指導」を行う「課題研究」に配分している。

(イ) 必修科目

必修科目の授業計画は、毎年、前年度の生徒の授業評価の分析・検討に基づいて作成している。また、すべての教科において年度始めにシラバスを作成し、それに沿って授業を展開している。

第1学年では、主に基礎学力重視の観点から中学校の内容との連続性を意識して展開し、第2学年では学力の充実・発展の観点から構成を考えている。第3学年では大学での教育との連携

を意図し、各科目の特徴を捉えて授業を行っている。

授業の基本方針は、わかりやすい授業、探究や思考力、判断力、表現力を高め、生徒が主体的に取り組めるような授業形態、大学への架け橋となる専門的な内容を盛り込んだ授業、社会との関わりを意識した授業を心がけている。具体的には理数教科で学部教育の基礎となる学力の強化をはかるべく、一定の基準に達しない生徒への追試や補習授業を行った。さらに、語学や人文社会科学系の科目では、アクティブ・ラーニングを取り入れた授業も多く、また、プレゼンテーション技術の習得や論文執筆指導を含む授業展開も多くなされた。

最近では、反転授業・ジグソー法などの新しい授業形態を取り入れたものや、複数科目のコラボレーション授業など、新しい授業形態への取り組みも多い。また、各科目の節々で本学院の特色である論文教育を推進するアカデミックリテラシーを意識した授業展開がなされている。

（ウ）選択科目

- ・ 2 年次：どの分野に進む生徒にも、数学Ⅱ及び数学 B は必修としている。ただし、理工系で必要とされる内容と経済や商学部などで必要とされる内容は異なる部分もあるため、数学に関しては文系用と理系用を用意して選択させている。また、文系には古典を、理系には物理・科学課題研究を用意し、考えることと実際に体験することを軸に据えた授業を展開している。
- ・ 3 年次：本学院のカリキュラムの最大の特徴として、3 年生に豊富かつ多様な選択科目を履修させていることが挙げられる。音楽や美術、第二外国語（フランス語、スペイン語、中国語、朝鮮語等）も含む選択科目は、必修選択と自由選択を併せて合計 7 科目 14 単位を選択することが規定となっている。具体的な内容としては、学部の専門科目の導入的な性格を持つもの、時代に必要とされる力を意識したもの、早稲田の一員ということを認識させるものが設置されている。

（エ）英語能力試験

4 月に GTEC Advanced (3 技能)、9 月に TOEFL ITP または、TOEFL Junior、11 月に 3 年生のみ GTEC4 技能試験を実施した。GTEC4 技能試験を実施する背景は、

- ① 学院生が自らの英語能力を客観的に知るため
- ② いくつかの学部進学の際に英語力が資格要件として課されているため
- ③ どの学部からも調査書と共に英語の 4 技能外部テストスコアの提出を求められていることに対応するため

である。

（オ）大久保山学

「大久保山学」設置の趣旨は、キャンパス環境を利用した学習教育プログラムや、学際的かつ総合的な視点から学習に取り組むことで、断片的な知識の集積ではなく、総合的な理解力や判断力を養成することを狙いとしている。本学院を取り巻く自然環境や歴史的遺産を生きた教材としてカリキュラムに活用するという考え方がその基となっている。

本学院は本庄市の浅見山丘陵に位置し、面積は 70 数 ha、長辺は 1.5 km に及ぶ。丘陵の一部の字名は「大久保山」であり、通称的に丘陵地帯全体を大久保山と呼んでいる。ここからは埴輪や土器などが大量に出土しており、丘陵周辺の平地には条里制の遺構跡も発見されるなど、山全体が歴史的遺産と位置づけられる。また、オオタカをはじめとする多くの野生生物が棲息し、多様な樹木や植物が繁茂している。さらに 本庄キャンパスのわきには利根川の支流である小山川、農業用水路である男堀川が流れ、科学関連プログラムの水質・生物調査の対象になり、地域との交流の舞台にもなっている。

本学院は「将来構想」（2012 年 11 月公開）の中で「大久保山学」を教育の特色の一つとして位置づけ、具体的にどのような教育プログラムが展開できるかについて検討を開始した。そして 2013 年の「Waseda Vision 150」の中で、「地域の特色を活かした『森に思い土に親しむ』教育を一層発展させた『大久保山学』をテーマに、科目横断型の教育・研究を通じて、社会の各分野で活躍できるリーダーを育成する」と基本理念を定め、その実現を図るための教育プログラムを「大久保山学」とした。

授業は木曜 2 時限目に 8 講座を同時開講し、前期と後期で異なった講座を履修する Semester 制とした。生徒は 8 通りの組み合わせパターンの中から 1 つを選択することとしている。下表は 2021 年度の大久保山学の一覧である。

コース	前期	後期
1	Silent Spring を通して考える環境破壊と大久保山	大久保山の数理科学
2	『平家物語』からみる武蔵武士	大久保山の環境と生物多様性
3	本庄市周辺の歴史と文学	不確実性下における意思決定入門
4	大久保山に住む人ってどんな人？	Silent Spring を通して考える環境破壊と大久保山
5	大久保山の環境と生物多様性	本庄市周辺の歴史と文学
6	不確実性下における意思決定入門	『平家物語』からみる武蔵武士
7	大久保山の数理科学	物理を使って様々なものを見てみよう
8	物理を使って様々なものを見てみよう	大久保山に住む人ってどんな人？

（カ）課題探究

第 3 学年の木曜 3 限に総合的な学習の時間「課題探究」を設定している。この科目は第 3 学年の組主任 8 名で担当し、年間 20 回の授業を修学旅行関連学習に約 10 回、卒業論文指導に約 10 回を年間計画で配置し実施している。同時に、学年集会（ガイダンス・学院長による修学旅行関連講話）や学年行事（教育実習生によるパネルディスカッション）との関係も図っている。

修学旅行関連学習では、COVID-19 のために昨年同様海外への修学旅行を中止し、国内旅行に向けての事前学習（ガイダンス、班決め・実行委員決め、コース別学習およびしおり作り）を行った。

次項（キ）に詳細のある卒業論文については、個々に異なるテーマを探究しているが、この総合的な学習の時間を用いて探究過程や内容の発表により取り組みを共有し、自分のテーマのみならずより広い範囲に目を向けての探究活動を行う機会となった。またこの時間を担当教員とのディスカッションに充てる機会もあり、課外活動等である程度限られてしまう放課後の時間だけでは得られないより深い探究活動ができている。

（キ）探究活動（卒業論文）

3 年間の学習のまとめとして卒業論文を作成する。「自ら学び、自ら問う」という本学院の教育方針の具現化のひとつである。2 年次の 9 月から 10 月中旬までの約 2 か月をかけテーマを決めるが、専任教諭と一部の非常勤講師のからなる担当者と綿密な話し合いをした後に、卒論のテーマが決まる。その後、12 月から 3 年次の 12 月まで約 1 年間で、論文を完成させる。

自分の決めたテーマにじっくりと向き合い、資料を集め、考察し、自分の意見をまとめ、それを論理的な文章に表す。この作業を通じて、問題意識を持つこととその解決方法、学術的な調査の方法、客観的な説得力を持つ文章の書き方、著作権や知的財産権への配慮等を学びながら自分自身の考え方をしっかりと持つことができ、学部進学への自覚を促すことになる。

論文執筆期間の、4 月と 9 月に 4000 字程度（英文は A3 用紙 5 枚程度）の中間報告を義務付け、その都度担当者と協議をすることになっている。

- ・ 第 1 次中間報告 4 月
テーマ登録からすでに 5 ケ月が経過している。この間の進捗状況を報告する。
- ・ 第 2 次中間報告 9 月
夏休みを経過し、まとめの作業に入る前に、論文構成の確認のために目次を作る。

なお、論文の枚数などは以下の通りである。

- ① 用紙：A4、1 ページに 35 行、1 行は全角で 40 字（1 ページあたり 1,400 字相当）。Microsoft Word（doc、docx）で作成。
- ② 分量 15 枚以上。
- ③ 規程枚数には目次、本文、図表、注、参考文献リスト等を含める。但しアブストラクトは含めない。
- ④ 印刷：A4（縦書き、横書きともに同じ）用紙の片面に印刷する。
- ⑤ 学院から配布される所定のファイルにとじること。

- ⑥ 表紙には、配付の所定の表紙を使用すること。
- ⑦ やむを得ずタイトルの変更をしなければならない者は、事前に担当教員の許可を得ておくこと。
- ⑧ 英文の場合は、**A4** 用紙にダブルスペース、半角で作成し、片面印刷で **25** 枚以上とすること。枚数に含めるべき内容は和文の論文に準じる。**Microsoft Word (doc、docx)** で作成する。

【卒論報告会】

コロナ禍以前の卒業論文報告会では、早稲田大学本庄高等学院3年生3名と慶應義塾湘南藤沢中等部・高等部6年生1名が執筆した論文とその執筆過程を主に2年生に向け対面で発表していた。

しかし、昨年度からは新型コロナウイルス感染対策により、執筆過程が記載されたレポートや論文内容を解説した動画をオンデマンドで配信している。

本年は以下の4本の卒業論文を選出した。

- ・「早期英語教育に効果的な英語絵本の特徴について」
- ・「東京ディズニーリゾートの音楽構造 ～夢の国であり続ける理由とは～」
- ・「現代日本社会の日露戦争評価 ～旧日本陸軍と司馬史観にみる～」
- ・「**SIR** モデルを用いた早稲田大学本庄高等学院における感染症数理モデルとその応用」

生徒が繰り返し視聴でき、執筆過程などの内容もじっくり読むことができるというオンデマンドならではの利点があった。2年生の学年行事ではあるが、オンデマンドの強みを生かし2年生のみならず1年生にも配信した。2年生にとっては執筆を進める上での大きな指針に、1年生にとっては今後の卒業論文におけるテーマ設定や構想のまとめ方などの参考となるなど学習上の効果が達成された。

2.2 課外講義

2.2.1 キャリア教育

従来の進路指導では、学部説明会を中心に、学部で学べる内容を理解してもらい、自分の行きたい学部を選択するというスタンスであった。

しかし、留学やセカンドスクール、あるいは大学院までを前提として学ぶ期間が長くなる傾向など、現代における大学生生活の多様性を考えるに、これからの進路指導は、まずは学部生活に加え、留学・セカンドスクール・サークル活動・アルバイトなどを含め自分の大学生生活のデザインをイメージした上で、では生徒に何を学ぶかを考える機会を与えることが必要である。

そのためには、一度自分の将来の方向をぼんやりでもいいから見つめ、そこへ至る過程としての大学生生活という、大学の位置付をしっかりとっておかなくてはならない。このような進路指導に対する考えから、近年、本校では自分の将来を考えるきっかけとしてキャリア教育を充実させるべく、努力している。

その2つの柱が、9月に集中的に行うキャリアデザインウィークと、それとは別に月一度のペースで行うキャリアデザイン講座である。

(ア) キャリデザインウィーク

2021年9月にキャリアデザインウィークを設け、現在の学院生活、大学、その先の将来を有機的に結び付けたキャリアパス意識を啓発するような講座を集中的に行った。以下の表にその概要を示す。

なお、今年度は新型コロナ対策のため、オンライン形式での実施とした。また、講義の動画は録画をし、一定期間オンデマンド形式で視聴できるようにした。

部門	日程	分野	タイトル	参加者数
進学の部	9月15日	政治経済学部	コロナ後の世界経済	33
		文学部	「社会」とは、「社会学」とは何か	16
		基幹理工学部	太陽系内のカオスと宇宙ミッション	31
		創造理工学部	地球のお医者さんが夢見る「未来の	16

			土木」	
		政治経済学部	文系？理系？今の政治学に求められる素養とは	25
		文化構想学部	子供・若者の社会的移行を考える	10
		先進理工学部	物理・数学・応用物理	22
		人間科学部	脳の人間科学	29
	9月22日	スポーツ科学部	文化としてのスポーツを「考える」	8
		国際教養学部	ゲーム理論入門	17
		教育学部	表現と検閲	5
		商学部		21(オンデマンド)
	就職の部	9月11日	野村総合研究所	学院から世界へそして日本へ
経済産業省			霞が関で働くということ	25
地方公務員			地方公務員の仕事と私が早稲田で得たもの	2
基幹理工学部表現工学科			現役大学生が語る令和の就職活動	5
先進理工学研究科電気情報生命専攻			理系の学院～大学生活	7
9月18日		東京大学大学院理学系研究科	早稲田の理系進学を目指す皆さんへ	5
		キンビバレッジ	CSVを基軸とした飲み物の世界い	11
		ソニーグループ	インターンシップを通じて今の会社と出会うまで	8

【進学の一部】

2021年9月15日（水）、22日（水）に「キャリアデザインウィーク進学の一部」を実施した。

政治経済学部は法学部からは別学院生に向けた説明会、商学部からは動画提供を受け早稲田大学の学部について網羅的に情報を得ることができた。また、教育学部については、講義の前に教育学部出身の教員によるミニ講演も併せて行いより深く学部について理解する工夫を行った。

生徒たちは、講演の後も活発に質疑を行うなど、オンライン上であっても教授とのやり取りを行うことができた。附属校として大学を意識し、また、ミスマッチのない進学のために大学について理解する良い機会となった。

【就職の一部】

2021年9月11日（土）、18日（土）に「キャリアデザインウィーク就職の一部」を実施した。

11日には5名、18日には3名のOB・OGによる講演を行った。参加したOB・OGは大学生1名、大学院生2名、一般企業3名、国家公務員1名、地方公務員1名である。参加生徒の人数は教室およびオンラインでの参加が延べ61名、オンデマンド形式での視聴は延べ22名であった。参加生徒はおよそ8割の生徒が今回の講義が進路のために役に立ちそうであるとアンケートにて回答している。オンライン形式での対応であったため、1つの時限に同時に3教室程度の開催が限界であった。

（イ）キャリアデザイン講座

9月に集中的に行うキャリアデザインウィークと並行して、およそひと月に一度、年間6回程度のペースで本校OB/OGを招き、キャリアデザイン講座を開講している。以下は2021年度実施内容である。

日時	講師
5月22日（土）	建築家
7月10日（土）	国家公務員（財務省）
10月9日（土）	映画監督
11月13日（土）	報道カメラマン（朝日新聞）
3月8日（火）オンライン開催	不動産（三菱地所）

2.3 行事

2.3.1 稲稜祭

新型コロナウイルスの感染状況を注視しながら、当初は非公開（学院生・教職員のみ）対面によるステージ企画・クラス企画の開催を目指して準備を進めた。しかし、緊急事態宣言の発出など感染状況が悪化するなか、対面による開催内容を縮小せざるを得なくなった。結果として、文化部・有志団体のステージ発表については人数制限をかけながら対面・有観客で開催し、クラス企画はオンデマンド動画による任意参加となった。

ステージ企画は稲稜ホールと校舎前特設ステージの2本立てで実施した。2年ぶりのステージ設営となった。また、稲稜ホールの企画はYouTubeライブにより学内関係者向けに限定配信を行った。ステージの観覧は事前申し込み制とし、特設ステージにも旧校舎で使用していた椅子を設置し、全席を指定するなど感染対策に万全を期した。席数を十分用意したことにより、対面による観覧を希望する生徒は全員が参加できた。

クラス企画は任意としたが、準備期間の短さにもかかわらず、24クラス中17クラスが参加した。全学院生が一堂に会する形は取れなかったものの、中夜祭・後夜祭も従来に近い形で実施することができた。

対面による実施をステージ企画のみにしたため、オンデマンド動画による変更が難しい文化部の展示については例年より縮小した。



稲稜祭時に使用したステンドグラス

2.3.2 体育祭

例年6月初旬に行っているが、本年度も新型コロナウイルス感染症予防のため、中止となったが12月15日（水）に当初予定していたマラソン大会を中止とし、団体種目のみのミニ体育祭を実施した。実施種目はクラス全員リレー・台風の目・綱引き・大縄跳びである。冬休み前の日で、午前中のみの実施であったが、クラス一丸となる機会を作ることができた。

2.3.3 球技大会

10月14日（木）に第1・2学年で実施した。男子がソフトボールとサッカー、女子がバレーボールを行なった。クラスの団結力が見られた有意義な時間であった。

また今年度は11月4日・11日（木）2週に渡って総合・LHR時間を活用して第3学年の球技大会も実施した。男子はソフトボールとサッカー、女子はバスケットボールとドッジボールを行った。数少ない今年度の学校行事として、高校生活の思い出の時間となる貴重な行事となった。

2.3.4 マラソン大会

例年12月冬休み前の日に行っているが、本年度も新型コロナウイルス感染症予防のため、中止とし代わりにミニ体育祭を実施した。

2.3.5 人権教育

本年度の人権教育講演は11月17日（水）に稲稜ホールにて実施した。対象は2学年とし、「多様な性ってなんだろう？～互いの違いを受け止めあえる社会を目指して～」と題し、非営利

活動法人 ReBit（リビット）の講師が担当した。

講演では、当事者の講師のライフヒストリー紹介、多様な性・セクシュアリティについての知識、カミングアウトやアウティングについての説明のほか、活発な質疑応答が行われた。

2.3.6 芸術鑑賞教室

10月14日（木）に、本庄市民文化会館で実施した。例年、全学年参加の行事であるが、感染対策のため本庄市民文化会館の人数制限があり、3年生のみの参加となった。演目は、「落語」（林家つる子、林家けい木、金原亭駒平、鏡味仙成（太神楽）、井上りち（お囃子））で、約1時間半程度鑑賞した。落語だけでなく、太神楽やお囃子もあり、コロナ禍でイベントが少ない中、生徒が楽しい時間を過ごす貴重な時間となった。

2.3.7 早慶野球戦観戦

例年、5月末に行われる六大学野球リーグ最終戦（早慶戦）の応援に第1学年行事として参加していたが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により観戦を中止した。昨年に続き2年連続での早慶戦観戦なしとなったが、早稲田大学への帰属意識を高める貴重な機会であり、2022年度は再開が強く望まれる。

2.3.8 秋の学年行事

修学旅行が新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から止む無く中止となったため当初の10月12日（火）及び13日（水）が通常授業となった。14日（木）については1、2年は球技大会であるが、3年生は学年行事日とすることが教諭会決定された。8月27日（金）の臨時教諭会で3学年のみ本庄文化会館で芸術鑑賞教室を実施することになり、10月14日（木）に予定通り実施された。芸術鑑賞会については以下のとおりである。

10月14日（木） 第3学年芸術鑑賞会について

【公演内容】落語林家つる子さん（ほか数名）

【場所】本庄文化会館 【時間】12:45~13:45 1時間程度

2.3.9 健康教育

【第1学年】6月10日（木）「こころの健康について」 檜木啓二先生（大学学生相談室）

【第3学年】6月17日（木）「依存症の実態と予防」 瀧村剛先生（久里浜医療センター）

例年、各学年に1回、講師を招いて心身の健康に関する講演を実施している。昨年度はオンラインでの実施であったが、今年度は稲稜ホールにて、対面で実施することができた。講師の先生には、講演後に生徒の質問や相談にのっていただき、有意義な機会となった。

2.3.10 交通安全等講話

4月10日（土）に、第1学年オリエンテーションの一環として、「交通安全講話」を実施した。

本庄警察署員による講話で、主に自転車の安全走行や登下校中の防犯、SNSでの犯罪やトラブルに関する内容であった。映像も交えた話をしていただき、具体的に考えるきっかけとなった。生徒の受講態度も良く、交通安全への啓発を効果的に行なうことができた。

2.4 課外活動

2.4.1 生徒会活動

コロナ禍であったが、稲稜ホールの客席使用制限の範囲内で、対面による発表をできるだけ再開するよう努めた。

執行部費でドローンを購入し、希望する公認団体等に貸出しを開始した。大学の許可を受けたうえで、キャンパスの空撮を行い、学校説明会動画などにも活用された。

生徒会の企画により 10 月 20 日に赤十字血液センターの献血バスを配車し、献血を実施した。事前に申し込みを受け付け、約 20 名の学院生が献血に参加した。

また、本庄市による「魅力発信プロジェクト」に執行部のメンバーが参加した。市内の高校生が集まり、市内各所を取材して広報誌の作成・写真展を行った。他にも、次世代地域づくり会議など市が主催する事業に執行部が協力した。

2.4.2 部活動

文化部門24、体育部門15のクラブが活動した。

クラブの活動目的は心身の成長を目指すもの、より上位の大会での成果を目指すもの、稲稜祭での発表に力を注ぐもの、部員の親睦を図るものなど異なるが、コロナ渦で様々な制限のある中で各クラブはそれぞれの目的に向かって活発に活動した。

本年度も埼玉県学事課から示される指針を参考に、学内ガイドラインを定め、それに準じた活動となった。具体的には、練習時間の短縮や活動回数制限、終日活動の禁止等で、昨年度よりは緩和することはできたが、通常活動と比べるとまだ制約の厳しい1年となった。

昨年度中止となった全国大会につながる高体連や高文連の大会は、無観客試合が多いものの本年度は開催され、全国大会に陸上部、スキー部、囲碁将棋部が出場、関東大会にソフトテニス部が出場するなど多くの活躍がみられた。

文化部でも、有観客での校内発表が難しい中、オンライン発表等の工夫を凝らして多くの発表を行うことができた。

2.4.3 科学教育課外プログラム

(ア)「これがサイエンスだ！」特別講義

本学院教員による特別講義「これがサイエンスだ！」を、以下の内容で実施した。今年度はすべてオンラインで行った。この講座は、毎年数回、生徒たちに対して科学に興味を持つきっかけになることを目的に実施している。

「判断のための数学 ―統計学のススメー」(数学科：峰真如教諭)(オンデマンド配信)

また下記の内容で特別講演を実施した。

フロンティアに立つ研究者に直接講演をしていただくことで、科学に対する興味の励起、最先端の科学トピックや研究についての理解を深めることを目的に、以下の概要で特別講演を行った。今回は、4月から入学する新1年生及びその保護者に向けて、高校生活を知ることが目的に、案内したことも特徴である。多くの新入生が参加した。165名が参加した。

- ・ タイトル：「ニホニウム～人工元素発見について～」
- ・ 日時：2022年3月12日(土)17時～19時
- ・ 講演者：理化学研究所 羽場宏光博士
- ・ 対象者：全学年希望者
- ・ 形式：Zoomによるオンライン講義

(イ) 河川研究班の活動

河川研究班の活動は、2009年に開始された。当時本庄市・早稲田大学榊原研究室が進めていた元小山川の河川環境改善活動に載る形で、当時のSSHプログラムの1つとして実施された。2012年には同様に河川環境保護活動を行っていた本庄市立藤田小学校と連携し、年2回の合同河川調査と年8回の5・6年生の総合学習の授業を本校生徒が受け持つこととなった。河川研究班は部活動ではない。この活動に興味を持つ生徒を毎年新年度に募集し、10～15名の生徒で活動している。多くの生徒は3年間継続する。

2020 年度はコロナ禍の中、合同河川調査は 11 月の 1 回、授業は 11 月に 2 度しか実施できなかった。今年度は、年 2 回の合同河川調査、5 回の授業を実施することができた（内 2 回は感染に配慮して教員のみ）。また、感染への配慮から、児童間の距離がとれるように体育館で授業を行った。



元小山川における藤田小との合同河川調査



実体顕微鏡によるプランクトンの観察

なお、2020 年度に続いて 2021 年度も公益財団法人 中谷医工計測技術振興財団の助成のもとで活動を行っている。

また、長年にわたる地道な活動が評価され、令和 3 年度彩の国埼玉環境大賞優秀賞・第 11 回毎日地球未来賞 SDGs 未来賞を受賞した。



令和3年度彩の国埼玉環境大賞表彰式



第11回毎日地球未来賞 SDGs 未来賞授賞式

2.5 国内外交流・研修

2.5.1 修学旅行

修学旅行の目的について文部科学省は、「平素と異なる生活環境の中で見聞を広げ、集団生活のきまりを守り、公衆道徳について望ましい体験を得ることなど」と述べているが、これに加えて、友人とともに未経験のことに挑戦することも大きな目的である。

具体的には、説明や文章で理解した史実を、現地の地形や、そこで生活する人から歴史を聞くことで考えを深める機会を作る、景観や環境を守っている人々からその思いを聞き SDGs を実行する強い心を持つ、豊かな日本の自然を実感しそれを受け継いでいく方法を模索する、そこに住む人々との交流を通し、都市部と山間部との生活の違いを実感し、人々の多様性を知るなど、その場でしか経験できない貴重な体験を積める行程とする。

以上の目的を達成するために、目的をしっかりと認識して事前に十分な事前学習を積んだ上で出発させることとしている。しかし、今年度は年度当初のコロナ感染状況から修学旅行は中止とし、授業や芸術鑑賞会に充てた。

2.5.2 海外からの訪問交流

海外交流校等への現地派遣は日本と各国の新型コロナウイルス拡大感染状況のため今年度も実施できず、学習交流プログラムはすべてオンライン開催となった（2.5.4 参照）。

2.5.3 留学

（ア）長期留学生の受け入れ

AFS の文部科学省補助事業・アジア高校生架け橋プロジェクト生として、インドからの留学生リシタ・シングさんを10月31日から3月16日まで受け入れた。コロナ禍の中、9月初旬からの受け入れが大幅に延期され、10月16日に来日し、成田での隔離期間を経て10月31日に入寮、11月2日から授業に参加した。コロナ禍により学校行事を例年通りに実施することができなかったが、1年生の必修授業、地域貢献プログラム、国内外共同学習プログラム、部活動等に積極的に参加した。

授業期間中の寮生活の経験に加え、長期休業やオンライン授業期間中はAFS 群馬支部のボランティアの方々の厚意でホームステイも経験し、充実した留学生生活をクラスメイトや寮生、部活動の仲間とともに過ごし、優れた学習への取り組みを達成できた。リシタさんは「架け橋生」との使命感も強く、日本語学習に励み、学内でヒンディー語講座やインド文化紹介を積極的に行った。また、留学期間の学びの集大成として日本の教育課程の「道徳」「倫理」どのように高校生に受けとめられているかを文献研究および半構造化インタビューで探究し、13ページの英文レポートにまとめるなど、優れた学習成果を挙げた。

コロナ感染拡大状況で海外交流校等からの訪問交流や海外修学旅行が一切ストップする中、1名とはいえ長期留学生を迎え共に学んだことによる在校生へのインパクトは大きく、リシタさんとの接触がより多かった集団では出身地や国籍より個性をみる視点が養われ、自身の留学のビジョンやホストファミリーへの関心を口にする生徒も見られた。



授業中のディスカッション



ヒンディー語 連続ミニレッスン



クラスメイトと（前列右から3人目）



「醤油と絹をめぐるバスツアー」で醤油搾り体験



2022 年 3 月川のシンポジウムでリシタさんによるガンジス川についてのプレゼン

(イ)「荻野奨学金」を活用した受入留学生支援（初年度）

本学院は、早稲田大学で学ぶ留学生の学習支援のための指定寄付「荻野奨学金」を活用する箇所の 1 つとして選ばれ、21 年度から 25 年度までの 5 ヶ年間に受け入れる留学生の学習、および留学生と在校生との共同学習にこの奨学金が使えるようになった。

活用初年度にあたり、留学・交流委員会で活用ガイドラインを作成し、使用目的が

- A. 留学生が日本および学校生活のルールや慣習を理解し、大きな支障なく心身ともに健康に滞在できるための支援
- B. 留学生が日本語を学び、高校生の生活をより深く理解するための支援（公立学校や早稲田大学訪問、部活動大会の参加支援などを含む）
- C. 留学生が日本の風土・文化・芸術・歴史や現代社会の動き等を、学院生と共に学ぶための支援

に原則として該当するものに支出するとした。21 年度の活用事例と成果は以下の通りである。

- ・ 「UD トーク」（音声言語の翻訳字幕自動作成アプリ）教育機関向けプラン契約料（目的 A、B）
留学生が滞在期間中に可能な限り通常授業に参加できるようにするため、言語支援を目的として導入した。これにより授業担当教員は普段通りに授業を展開し、周囲の生徒も自分の学習に集中しつつ留学生と共に学ぶことができた。
- ・ アカデミックライティング指導（目的 C）
今年度は英語科非常勤講師に留学生サポートの一部を委託した。研究論文の基礎指導や執筆途中の助言等の支援を得て、“The Reception and Perception of Moral Education in Japanese Senior and Junior High Schools by Japanese Students and Teachers”を完成させることができた。
- ・ 在校生との共同学習プログラム「醤油と絹をめぐるバスツアー」実施（目的 C）
本庄および周辺地域の風土と産業を留学生と在校生が共に学ぶ機会として、北関東の伝統食文化および絹産業をテーマとしたフィールドワークを企画した。午前は神川町の「ヤマキ醸造」を訪問し醤油作りワークショップを経験、午後は富岡製糸場を見学した。留学生含む 14 名（1 年生～3 年生）が参加し、事前・事後学習に取り組んだ。
- ・ 早稲田大学および日本文化体験フィールドワーク実施（目的 C）
世話役教員が留学生の日本文化・社会への関心時を聞き取り、京都等へのフィールドワークを実施した。

これらの成果の紹介は主に留学生自身による学院ホームページへの以下の寄稿で発信した。国内外への成果広報を意図し、英語または日英 2 カ国で掲載をしている。

- “Greetings from Rishita Singh” (November 28, 2021)
- “Sharing Cultures at a Local Elementary School” (December 20, 2021, contributing her comment)
- “Soy & Silk Study Tour” (December 27, 2021, contributing her comment)
- “Rishita in Kyoto (1)” (January 14, 2022)
- “Rishita in Kyoto (2)” (January 15, 2022)

- “Rishita in Kusatsu” (January 29, 2022)
- “Rishita in A’ACS” (February 07, 2022)
- “Rishita in *Hinamatsuri*” (February 22, 2022。)

(ウ) 留学・交流委員会（教職員）の業務再検討

21 年度は対面での国内外交流プログラム再開の見通しは難しい一方、オンライン学習交流は徐々に定型化されてきたため、留学・交流委員会では交流企画の支援のあり方を協議した（22 年度に継続）。留学生の受け入れ数は 22 年度は増加する見通しとなったため、今年度の支援事例をもとに、「荻野奨学金」活用を含めたサポート業務を委員会内で分担するべく協議を進めている。

(エ) 在校生の長期留学

在校生の留学状況としては、「第 1 種留学」で 1 名、「第 2 種留学」で 2 名が今年度から留学した。行き先と留学期間は以下の通りである。

- ・ シンガポール（21 年度 3 学期より 1 か年）1 年生 1 名（男子）
- ・ フランス（21 年度 2 学期より 1 か年）2 年生 1 名（女子）
- ・ アメリカ合衆国（21 年度 3 学期より 1 か年）2 年生 1 名（女子）

2.5.4 海外交流プログラム

(ア) ミニシンポジウム「国際交流へのいざない」開催

2021 年度も 2020 年同様、対面の国際交流ができないことは年度当初に自明であった。しかしながら、本校が国際交流に熱心な学校と思って入学した生徒が多いこと、生徒たちの国際交流への興味をつぶしたくないことから、昨年度に続き今年度もミニシンポジウム「国際交流へのいざない」を開催することとした。

昨年度は在校生対象に 3 月末に実施したが、今年度は新入生も含めるためオンラインミーティングに慣れた 4 月末の 24 日（土）に実施した。これは 2020 年度のオンライン授業の教訓であるが、どうせならば学校の様子を理解してもらうため、保護者の参加も認めたいと考え、19 時～20 時の時間帯で Zoom により実施した。在校生・新入生・保護者を含め 180 人が参加した。

昨年 AACCS を共同開催した愛知県立半田高校、SSH 時代より交流のある茨城県の清真学園にもお願いし、教員にパネラーを務めてもらった。

(イ) シンガポール・ナショナルジュニアカレッジ (NJC) との社会科学系の学術交流

本学院と NJC は、自然科学系と社会科学系の 2 系統に分かれて学術交流を実施している。2021 年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響により、社会科学系の学術交流はすべてオンラインにより実施した。社会科学系の学術交流については、学院からは教員 1 名、学院生 5 名が参加し、NJC は教員 3 名、生徒 5 名が参加した。

共同研究テーマとして「To what extent has the temporary restriction of movement - inclusive of lockdown and state of emergency - affected students' academic studies?」を設定し、2021 年 6 月から 2022 年 3 月までの 10 か月間で延べ 86 時間ほどの学習に取り組んだ。

学術交流を実施するにあたり、本学院及び NJC と共同で月 2 回程度のゼミ形式のワークショップ及び討論を行い、実施にあたってはオンラインビデオ会議システム Zoom を利用した。加えて、クラウド上の書類作成システム Google Document を活用して、NJC と共同で研究発表資料の作成と研究論文の執筆を行った。

教員が本学術交流にかけたエフォートは延べ 100 時間程度であり、その内訳は実際の学術交流指導、学院生への研究指導、プログラム運営のための NJC の担当教員との打ち合わせ（Zoom 及び電子メールにて実施）である。なお、研究成果は 2022 年 7 月に実施する NJC 国際学術交流フォーラム（NJC 主催）及び 2022 年 10 月に開催予定の教育の国際化研究会（早稲田大学情報教育研究所主催）で英語による口頭発表を実施予定である。



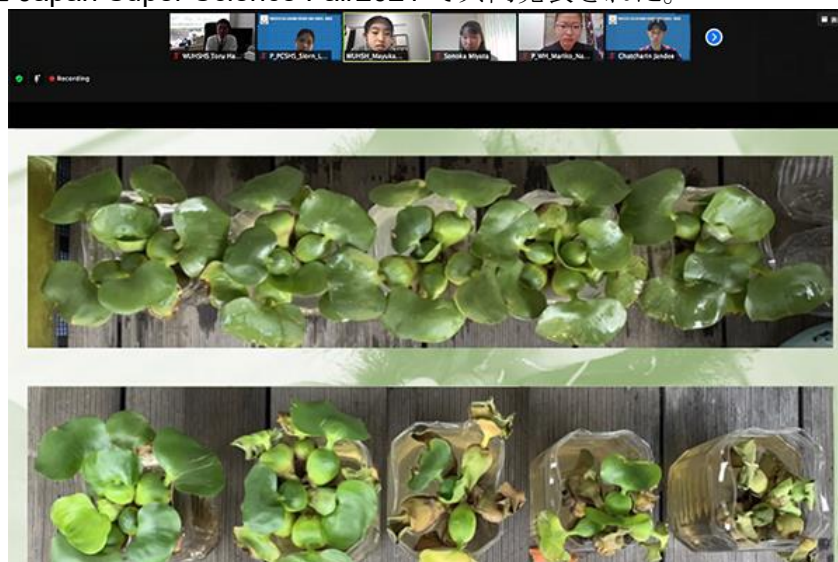
NJC とのオンラインによる共同研究打ち合わせの様子

(ウ) Philippine Science High School - Eastern Visayas Campus ・タイの Princess Chulabhorn Science High School Trang との共同研究

フィリッピン的高校・愛知県立半田高校との 3 校で「河川の水質」について共同研究を 8 月～10 月の間行った。予め調査項目を定め、それぞれの学校が近辺の河川で調査を行うという形をとった。本校からの参加生徒は 2 名である。

またタイ的高校と「外来種ホテイアオイの繁殖力」に関する共同研究を 8 月～10 月の間実施した。タイでは、ホテイアオイの繁殖に悩まされているとのことで、ホテイアオイの水質への対応力（特に pH や生活排水）・裁断された場合の繁殖力について、予め実験方法を打ち合わせ、双方で実験を行った。本校からの参加生徒は 4 名である。

二つの共同研究とも定期的に Zoom で実験方法や進捗状況を打ち合わせた。研究成果は、11 月に開催された Japan Super Science Fair2021 で共同発表された。



タイの高校とのホテイアオイに関する研究打ち合わせの様子

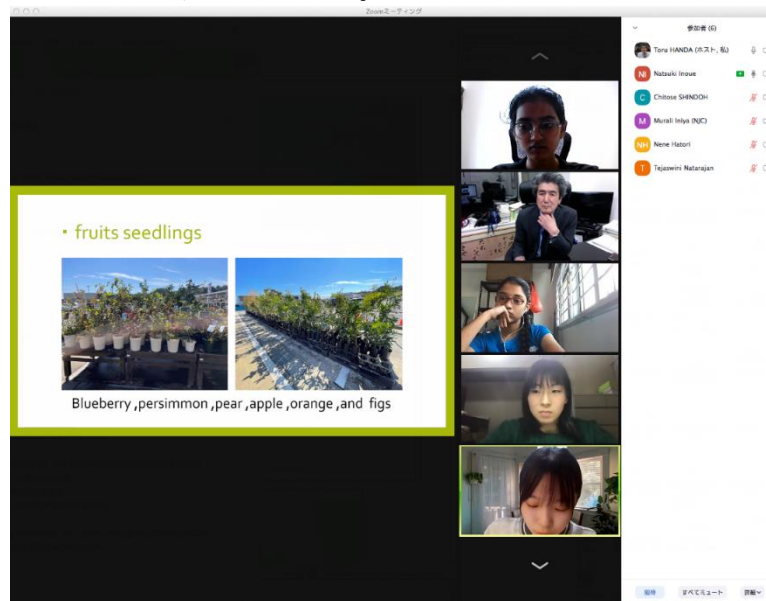
(エ) Singapore National Junior College (NJC)との科学共同研究プログラム

NJC とは 2007 年以来、科学分野に関する共同研究を軸とした相互訪問交流を継続していたが、2020 年度はコロナ禍の混乱のため、一対一の交流ができなかった。

今年度、NJC 側からオファーがあり、オンライン交流を行うこととなった。内容は「家庭菜園技術の今後」である。コロナ禍の中、シンガポールでロックダウンが行われた際、自由な買い物が制限されたため、家庭菜園が流行しているとのことで、日本の様子を共有し、今後の家庭菜園の位置づけを考えたいとのことであった。

7月にメンバーを募集し、本庄学院4名(内1名はフランス留学中でフランスの様子を紹介)、NJC2名で活動を開始した。11月末までに5回ほどのオンラインミーティングを行い、2月初頭のA'ACSで共同発表を行った。

資料作成に際して、株式会社カインズ本庄早稲田店のご協力を得た。またこの交流はJSTのさくらサイエンスプランとして実施している。



オンラインによる打ち合わせの様子

(オ) タイの Mahidol Wittayanusorn School(MWIT)とのミニシンポジウム

MWITはSSH指定後の2005年より断続的に交流を続けてきたタイの高校である。2015年よりNJC同様相互交流を行っている。昨年度は一对一の交流ができなかった。今年度、MWITのオファーにより、ミニシンポジウムを開催することとなった。

12月10日(金)15日(水)16日(木)15時~17時の日程でZoom上で実施した。参加生徒は本校11名、MWIT9名である。以下は内容のあらましである。

12月10日 Opening Ceremony (両校長挨拶、生徒挨拶、学校紹介)、Ice Break、Close-up Japan & Thailand (タイと日本の文化紹介、特に家庭環境、食生活)

12月15日 研究発表、タイ語教室、日本語教室

12月16日 Cultural Sharing (文化紹介、特にタイと日本の迷信・風習)、Virtual Excursions (訪問したら連れて行きたい場所)、Closing Ceremony (代表生徒挨拶、講評、校長挨拶)

双方、司会など役割をシェアし、発表もよく工夫されていた。通常ありがちな交流と異なり、例えば文化交流では料理や踊り・歌などの紹介が一般的であるが、家庭環境で自宅を紹介したり、迷信や風習などと、一歩進んだ文化の相互理解が得られる内容となっていた。

この交流はJSTのさくらサイエンスプランとして実施している。



日本語教室の様子（駅での会話）

（カ）Asia Academic & Cultural Sessions(A`ACS)の開催

AACS は昨年、例年ならば相互訪問している NJC や MWIT との交流が途絶えてしまうことを憂えた生徒からの申し出により、昨年度開催した小さな国際シンポジウムである。MWIT の訪問時期が同時期となる愛知県立半田高校との合同主催で開催している。課外プログラムがコロナ禍で制限される中、高い達成感を経験してほしいと考え、基本的にすべて生徒のコーディネートに任せている。

対面での交流が不可能な今年度も、昨年度よりも参加校を増やす形で 2 月 5 日 (土) 6 日 (日) 10 時～13 時の日程で Zoom 開催した。昨年度は参加校すべての生徒のミーティングで内容を決めたが、時差などの点からオンラインミーティングの開催が簡単ではないこと、参加校すべての生徒がコーディネートに興味がある訳ではないこと、なかなか議論が進まないことなどの反省から、今年度は本校と半田高校 2 校の生徒でコーディネートを行った。参加校として、日本は茨城県の清真学園、今年度水質に関する共同研究を行ったフィリピンの Philippine Science High School - Eastern Visayas Campus ・外来種ホテイアオイに関する共同研究を行ったタイの Princess Chulabhorn Science High School Trang を増やした。

昨年は、研究発表や SDGs に関するディスカッションなど、真面目な要素が多かったが、今年度はもっと楽しめることを主眼に、学校紹介でも生徒の一日の生活の紹介、語学講座、ゲームなどの要素を増やした。総じて、昨年の反省を踏まえ、よいシンポジウムだったと思う。



AACS の日本語教室の様子

（キ）韓国セロナム高校との学術交流

2022 年度の新しい試みとして、韓国テジョン市のセロナム高校とのオンライン学術交流を行った。初回の試みであるため、両国の参加生徒・教員により目標や進行方法等を協議しながら決定していった。テーマは持続可能な開発目標 (SDGs) に関する日韓両国の課題とし、日韓の生

徒が5名程度のチームを組んで共同研究することになった。使用言語はすべて英語とした。

6月頃までに打ち合わせを進め、参加生徒を募集した。希望者の中から12名（3年生8名、2年生2名、1年生2名）の生徒を選抜し、6チームに編成（マッチング）した。セロナム高校側の参加者は17名であった。各チームの生徒たちは8月3日（火）のキックオフミーティングの後、メール・SNS等を介して連絡を取りながら研究を進め、10月23日（土）にオンラインによる中間報告会に臨んだ。参加者による質疑応答を通じて研究内容の深化をはかり、12月21日（火）にオンライン最終シンポジウムを実施した。ここでも各チームによる共同研究発表と質疑応答があり、教員による講評を行った。報告会・シンポジウムのツールはZOOMを使用した。

同じアジアの高校生どうしとはいえ、言語・文化・学事日程の異なる日韓の生徒が直接顔を合わせないまま協働して研究を進めるのは容易ではない。対面での交流がかなわないなかで、生徒たちの相互理解を深める仕掛けづくりに工夫が必要である。

また、シンポジウムについては両校の生徒と教員のみが参加して行う形式をとったが、今後は広く公開することや、他校の参加についても検討したい。

（ク）その他派遣プログラム

「AIG 高校生外交官プログラム」2022年度参加者の募集が1月にあり、学内選考を経て応募した4名のうち1名が米国派遣プログラム（High School Diplomats）に合格した。

2.6 高大一貫教育

2.6.1 学部説明会

大学の教育内容や研究内容を知り、ミスマッチのない進学をさせるために、各学部の入試担当者による説明を開催している。本年度より日本医科大学にも推薦できるようになったため、日本医科大学での説明会も開催した。

早稲田大学

学部	日時
政治経済学部	9月30日
法学部	10月7日
文化構想・文学部	5月27日
教育学部	6月3日
商学部	6月10日
基幹理工学部	6月17日
	6月17日
	6月17日
創造理工学部	6月24日
先進理工学部	7月8日
	7月8日
社会学部	10月14日
人間科学部	7月15日
スポーツ科学部	9月9日
国際教養学部	9月16日

日本医科大学 4月28日 説明会（オンライン）

また、学部説明会は本校が計画実施しているイベントであるが、学部側からも積極的に学部理解を深めることを目的として、本校に向けた説明会が開催されている。2021年度実施されたものとしては以下の通りである。

- ・ 9月12日（日）15時～17時「法学部への招待」
生徒・保護者対象
- ・ 9月11日（土）15時～16時「社会科学部説明会」

生徒・保護者対象

2.6.2 学部開放科目（高校生特別聴講制度）

高校生特別聴講制度とは、大学生と一緒に、早稲田大学の正規授業を受講できる制度である。早稲田大学では、全国の高校生のために、学問への関心や進路決定の手助けになるように、正規授業を高校生へ開放している。

附属校である本学院は、授業料を全額免除になるほか、取得した単位は大学での正規の単位として認定されるため、大学教育の先取りとなっている。

〔受講期間〕 9月下旬～1月（週1回90分）

〔受講費用〕 無料（実習を伴う科目は実習料が必要）

〔受講場所〕 早稲田大学各キャンパスまたはオンデマンド（受講科目による）

〔開講科目〕 以下の表の通り

No.	箇所名	科目名	教員名	学期	単位数	キャンパス	募集時期	備考
50	グローバル	数学基礎プラス γ (解析学編) 01	高木 悟 他	夏クォーター	1	-	春	
51	グローバル	数学基礎プラス γ (解析学編) 02	高木 悟 他	秋クォーター	1	-	夏	
52	グローバル	Introduction to University Mathematics (Calculating Interest) A 01	曾布川 拓也	春クォーター	1	-	春	
53	グローバル	Introduction to University Mathematics (Calculating Interest) A 02	曾布川 拓也	秋クォーター	1	-	夏	
54	グローバル	Introduction to University Mathematics (Calculating Interest) B 01	曾布川 拓也	夏クォーター	1	-	春	
55	グローバル	Introduction to University Mathematics (Calculating Interest) B 02	曾布川 拓也	冬クォーター	1	-	夏	
56	グローバル	Introduction to University Mathematics (Optimization Problem) A 01	曾布川 拓也	春クォーター	1	-	春	
57	グローバル	Introduction to University Mathematics (Optimization Problem) A 02	曾布川 拓也	秋クォーター	1	-	夏	
58	グローバル	Introduction to University Mathematics (Optimization Problem) B 01	曾布川 拓也	夏クォーター	1	-	春	
59	グローバル	Introduction to University Mathematics (Optimization Problem) B 02	曾布川 拓也	冬クォーター	1	-	夏	
60	グローバル	視覚的に捉える群論入門 01	高木 悟	夏クォーター	1	-	春	
61	グローバル	視覚的に捉える群論入門 02	高木 悟	冬クォーター	1	-	夏	
62	グローバル	素数の魅力と暗号理論	野口 和範	秋クォーター	1	-	夏	
63	グローバル	データ科学入門 α 01	小林 学 他	春クォーター	1	-	春	※附属校のみ開放
64	グローバル	データ科学入門 α 02	小林 学 他	夏クォーター	1	-	春	※附属校のみ開放
65	グローバル	データ科学入門 α 03	小林 学 他	秋クォーター	1	-	夏	※附属校のみ開放
66	グローバル	データ科学入門 α 04	小林 学 他	冬クォーター	1	-	夏	※附属校のみ開放
67	グローバル	データ科学入門 β 01	野村 亮 他	春クォーター	1	-	春	※附属校のみ開放
68	グローバル	データ科学入門 β 02	野村 亮 他	夏クォーター	1	-	春	※附属校のみ開放
69	グローバル	データ科学入門 β 03	野村 亮 他	秋クォーター	1	-	夏	※附属校のみ開放
70	グローバル	データ科学入門 β 04	野村 亮 他	冬クォーター	1	-	夏	※附属校のみ開放
71	グローバル	Introduction to Data Science α 01	堀井 俊佑 他	春クォーター	1	-	春	
72	グローバル	Introduction to Data Science α 03	堀井 俊佑 他	秋クォーター	1	-	夏	
73	グローバル	Introduction to Data Science β 03	堀井 俊佑 他	秋クォーター	1	-	夏	
74	グローバル	潜在構造のデータ科学 01	野村 亮 他	春クォーター	1	-	春	
75	グローバル	潜在構造のデータ科学 02	野村 亮 他	夏クォーター	1	-	春	
76	グローバル	潜在構造のデータ科学 03	野村 亮 他	秋クォーター	1	-	夏	
77	グローバル	潜在構造のデータ科学 04	野村 亮 他	冬クォーター	1	-	夏	
78	グローバル	情報科学の基礎 01	中村 優一 他	春クォーター	1	-	春	
79	グローバル	情報科学の基礎 03	中村 優一 他	秋クォーター	1	-	夏	
80	グローバル	プログラミング入門 01	細谷 剛 他	春クォーター	1	-	春	
81	グローバル	プログラミング入門 03	細谷 剛 他	秋クォーター	1	-	夏	
82	グローバル	Introduction to Programming 01	齋藤 恵 他	春クォーター	1	-	春	
83	グローバル	Introduction to Programming 03	齋藤 恵 他	秋クォーター	1	-	夏	
84	グローバル	プログラミング初級(C/C++) 01	齋藤 恵 他	春クォーター	1	-	春	
85	グローバル	プログラミング初級(C/C++) 03	齋藤 恵 他	秋クォーター	1	-	夏	
86	グローバル	プログラミング初級(Java) 01	細谷 剛 他	春クォーター	1	-	春	
87	グローバル	プログラミング初級(Java) 03	細谷 剛 他	秋クォーター	1	-	夏	
88	グローバル	カーボンニュートラルと社会(学部生用)	有村 俊秀 他	春クォーター	1	-	春	

2) 高校生特別聴講制度開放科目

2022年1月21日現在

No.	箇所名	科目名	教員名	学期	単位数	キャンパス	募集時期	備考
1	法学	総合講座「法批判への招待」	弓削 尚子 他	秋学期	2	早稲田	夏	
2	法学	総合講座「ドイツ語圏を知る」	岡山 具隆 他	春学期	2	早稲田	春	
3	法学	総合講座「ことばと法・社会」	星井 枚子 他	秋学期	2	早稲田	夏	
4	法学	導入講義(選択) ―法曹の仕事を知る―	白石 大	春学期	2	早稲田	春	
5	法学	先端科学技術と法入門	肥塚 肇雄 他	秋学期	2	早稲田	夏	
6	教育	図書館概論 A	雪嶋 宏一	春学期	2	早稲田	春	
7	教育	地球生命史	川辺 文久	春学期	2	早稲田	春	
8	商学	ビジネス入門 1	山野井 順一 他	春学期	2	-	春	※附属・系属校のみ開放
9	文構	ギリシャ・ローマ世界入門	宮城 徳也 他	春学期	2	-	春	
10	文構	日本史・世界史再発見	小田 章 他	春学期	2	-	春	
11	文構	言語学入門	森田 彰	春学期	2	早稲田	夏	
12	文構	ヨーロッパのことばと文化	酒井 智宏	秋学期	2	戸山	夏	
13	文構	オペラ論	村井 翔	秋学期	2	-	夏	
14	文構	精神分析入門	村井 翔	春学期	2	-	春	
15	文構	現代文芸・文化論1	市川 真人	春学期	2	戸山	春	
16	文構	現代文芸・文化論2	市川 真人	秋学期	2	戸山	夏	
17	文構	日常生活の社会学	大久保 孝治	春学期	2	-	春	
18	文	初級ギリシャ語(速修)	栗林 琢也	春学期	4	戸山	春	
19	文	初級ラテン語(速修)	小倉 博行	春学期	4	戸山	春	
20	文	ギリシャ・ローマの思想と文化	宮城 徳也 他	秋学期	2	-	夏	
21	文	心理学概論1	小塩 真司 他	春学期	2	-	春	
22	文	心理学概論2	福川 廣之 他	秋学期	2	-	夏	
23	文	日本考古学概説	長崎 潤一 他	春学期	2	-	春	
24	文	人文地理学1	本木 弘徳	春学期	2	-	春	
25	基幹	基礎の数学 基幹(2)-II	奥村 克彦	春学期	2	西早稲田	春	※附属・系属校のみ開放
26	基幹	基礎の数学 基幹(4)-II	木村 晃哉	春学期	2	西早稲田	春	※附属・系属校のみ開放
27	基幹	数学A2(線形代数) 基幹(6)	柳谷 晃	通年@秋期	5	西早稲田	春	※附属・系属校のみ開放
28	基幹	Cプログラミング入門 基幹(3)	吉岡 剛志	春学期	2	西早稲田	春	※附属・系属校のみ開放
29	基幹	Cプログラミング入門 基幹(7)	寺田 晃太郎	春学期	2	西早稲田	春	※附属・系属校のみ開放
30	基幹	Cプログラミング 基幹(5)	金井 謙治	秋学期	2	西早稲田	夏	※附属・系属校のみ開放 ※「Cプログラミング入門」の習得が前提条件
31	創造	建築意匠と歴史	小岩 正樹/石谷 誠章	春学期	2	西早稲田	春	
32	先進	力学A 電生	山田 卓一	春学期	2	西早稲田	春	※附属・系属校のみ開放
33	先進	力学B 電生	辻川 信二	秋学期	2	西早稲田	夏	※附属・系属校のみ開放
34	先進	基礎化学A	鹿又 宣弘	春クォーター	2	西早稲田	春	※附属・系属校のみ開放
35	先進	基礎化学B	石原 浩二	夏クォーター	2	西早稲田	春	※附属・系属校のみ開放
36	先進	生命医学ゼミナールI	朝日 遼 他	春学期	2	西早稲田	春	※附属・系属校のみ開放
37	先進	電気・情報生命工学フロンティア	石山 敏士 他	春学期	2	西早稲田	春	※附属・系属校のみ開放
38	先進	生命科学概論B 生医	井上 貴文 他	春学期	2	西早稲田	春	※附属・系属校のみ開放
39	グローバル	数学基礎プラスα(金利編) 01	高木 悟 他	夏クォーター	1	-	春	
40	グローバル	数学基礎プラスα(金利編) 02	高木 悟 他	秋クォーター	1	-	夏	
41	グローバル	数学基礎プラスα(金利編) 03	高木 悟 他	春クォーター	1	-	春	
42	グローバル	数学基礎プラスα(最適化編) 01	高木 悟 他	夏クォーター	1	-	春	
43	グローバル	数学基礎プラスα(最適化編) 02	高木 悟 他	秋クォーター	1	-	夏	
44	グローバル	数学基礎プラスβ(金利編) 01	高木 悟 他	夏クォーター	1	-	春	
45	グローバル	数学基礎プラスβ(金利編) 02	高木 悟 他	秋クォーター	1	-	夏	
46	グローバル	数学基礎プラスβ(最適化編) 01	高木 悟 他	夏クォーター	1	-	春	
47	グローバル	数学基礎プラスβ(最適化編) 02	高木 悟 他	秋クォーター	1	-	夏	
48	グローバル	数学基礎プラスγ(線形代数学編) 01	高木 悟 他	夏クォーター	1	-	春	
49	グローバル	数学基礎プラスγ(線形代数学編) 02	高木 悟 他	秋クォーター	1	-	夏	

[出願期間] 5月24日(月)～5月31日(月)

2.6.3 競技スポーツガイダンス

高大連携の一環として運動部生徒を対象に例年5月第2水曜日及び11月第1水曜日に競技スポーツ育成の目的でスポーツ科学の基礎知識ガイダンスを実施してきた。残念ながら本年度は新型コロナウイルスの影響で中止とした。

スポーツ科学基礎知識講座については各部の要望を集約し、早稲田大学競技スポーツセンター及び早稲田大学スポーツ科学部と連携し内容を深めたい。

2021年度早稲田大学本庄高等学院卒業生の117名が早稲田大学各運動部所属し活動した。スポーツにおける高大連携の一環として競技スポーツガイダンスを継続実施してきた一つの成果と言える。

2.6.4 安全配慮義務プログラム

早稲田大学本庄高等学院における「安全配慮義務」の実践プログラムとして例年6月第3週を

安全対策準備週間とし、運動部生徒を対象に「AED 講習」「熱中症対策講座」を実施してきた。新型コロナ感染対策のため 6 月実施は中止としたが、12 月に「AED 講習」を各部 2 名以下の制限のもとで実施し、29 名が参加した。

2022 年度は従来の形式に戻し、各運動部 1 年生の参加を義務付けとし実施する予定である。
(新型コロナウイルス感染状況を考慮し参加者人数は調整する)

2.7 生徒指導

2.7.1 生徒指導の方針

本学院の生徒はおおむね高度な学力・理解力を有しており、また生活態度も模範的であり、深刻な生徒指導事案が起こることは稀である。とはいえ、自律心に欠け、成績不振や遅刻・欠席超過に陥るケースや、対人関係のトラブル、あるいは日々ハイレベルな競争にさらされることから精神的な不調を訴えることも少なくない。特に今般のコロナ禍においては、オンライン授業や部活動の制限などの感染対策によるストレスが大きく、メンタル面での配慮を強く必要としている。そのような環境下で、早稲田大学の付属校生としてふさわしい生徒を育成することを目指し、生徒指導の方針を定めた。

今年度の優先項目は新型コロナウイルスの感染拡大防止であった。都心部など感染拡大地域からの通学者が多く、2 つの生徒寮を運営している本学院は、感染リスクに対して敏感にならざるを得ない。そのため、放課後・休日における行動制限にも踏み込み、感染状況に応じ、レジャー施設（カラオケ・ライブハウス等）への出入りや大人数での会食の制限も行った。

また、コロナウイルス感染状況の把握や対応に追われながらも、従来の生徒指導目標を達成する努力も継続した。いじめや中傷、盗難、SNS トラブル等の未然防止に取り組み、集会ごとに早稲田大学への帰属意識や学院生としての矜持を高めるための講話を行った。

新型コロナウイルスの感染拡大により、生徒たちは様々な我慢を強いられ続けている。肩を組んで応援歌「紺碧の空」を歌った学院生も卒業を迎え、学校行事の伝統の灯をともし続けることも難しくなっている。次年度以降においては、コロナウイルス感染状況の完全収束がすぐには見込めない中で、いかにして学院生の満足度を高め、充実した生活を送れるようにするかが問われている。

2.7.2 2021 年度の状況

2021 年度は新型コロナウイルス感染対策の連続であった。日々刻々と変わる感染状況と、県（私立学校を管轄する学事課）からの通知に従いながら、食堂、部活動、寮生活でのルールなどを改定していった。また、感染者や濃厚接触者、感染疑い者（発熱症状等）の発生のたびに状況の調査と感染拡大防止の対応を行った。結果的に、新型コロナウイルスへの感染を完全に防ぐことはできなかったものの、5 人を超えるような大規模な感染者集団の発生は起きず、寮運営も継続できた。

生徒指導案件は年間で 7 件であった。うち停学・謹慎を伴うものは 5 件であり、スクールバスの不正乗車、定期試験における不正行為等が該当した。

3. 生徒

3.1 生徒受入（入学試験）

3.1.1 入学試験全般（志願者数・入寮者数、出身都道府県等）

- ・ 志願者総数は 3200 名で、前年度比 +402 名となった。一般・帰国生入試では、東京都と神奈川県および首都圏外からの志願者の増加が目立った。
- ・ 入学予定者 323 名で、男子 178 名（55.1%）、145 名（44.9%）である。
- ・ α 選抜では、志願者数が大幅に減少し（前年度比 -30 名）、男子の減少が目立った。
- ・ I 選抜の志願者数は、前年度比 -4 名となった。前年度比で見れば大きな志願者減ではないが、2 年度前の 2020 年度入試の志願者数と比べると、依然コロナ禍による影響を受けているといえる。
- ・ 帰国生入試・I 選抜を合わせた志願者数は 271 名で、前年度比 -16 名となった。昨年度と同様に、世界的な新型コロナウイルス感染症の影響により、志願者数の低迷が続いている。

- ・ 学院説明会は、第1回と第2回は昨年度と同様にオンラインでの個別相談会を行った。第3回の説明会は1年半ぶりに対面と、オンラインとを併用した個別相談会を行った。また、入寮者の増加に向けた、生徒寮の相談に限定した個別相談会は、第1回と第2回はオンラインで、第3回は対面で実施した。入寮予定者は早苗寮51名、梓寮25名である。

全体	埼玉県	東京都	神奈川県	千葉県	群馬県	他都道府県	海外
2021年	141	85	28	12	15	14	27
2022年 (323名)	122	98	20	13	22	22	26
	37.6%	30.2%	6.1%	4.0%	6.7%	6.7%	8.0%

3.1.2 広報・学校説明会

- ・ 学院説明会は新型コロナウイルス感染症の感染状況に合わせて、その開催方法を柔軟に変更して実施した。第1回および第2回説明会は昨年度と同様にオンライン開催とした。第1回は動画コンテンツの配信のみだったが、第2回はZoomを使用した入試個別相談会を実施した。第3回説明会については、感染状況が落ち着いていたため、1年半ぶりに対面での実施とした。ただし対面の説明会では参加者数が限られること、遠方での受験生の参加が難しいことから、説明会を対面（講演会、施設見学、個別相談）とオンライン（講演会ライブ配信、オンデマンドコンテンツ）を併用して実施した。また感染症対策を取りつつ、可能な限り参加者を増やすために、対面での講演会は4部制で実施した。
- ・ 寮の広報として、第1回および第2回説明会でオンライン個別相談会（各回定員45組）を実施し、2回ともすべて満員となった。このうち一都三県以外の都道府県在住者は13組、海外在住者は13組であった。これに加え上述の学院説明会への海外在住者参加数より、オンライン説明会が海外在住者への良い情報発信の機会になったことが推察できる。また、第3回説明会では対面での寮個別相談会（事前予約不要）を実施した。
- ・ オンラインによる学院説明会の運用は本年度で2年目となり、徐々にそのメリットとデメリットが明らかになってきた。これらの特性を理解し、世界的なパンデミックが収束した後も対面とオンラインを組み合わせた、いわゆるハイブリッド型の入試広報を進めるべきだと考える。
- ・ 新型コロナウイルス感染症の影響で外部団体主催の個別説明会の多くは中止となった。また、長期休業期間中の海外在住者向け学院見学会も開催を見送った。

3.1.3 入試実施体制

- ・ 2021年度入試に引き続き、文科省からの指示に従い、新型コロナウイルスの「無症状の濃厚接触者」の受験を認めた。2名の受験生から申請があり、入学センターと協議の上、別室での受験を認めた。
- ・ 2019年度入試で自己推薦合格者に辞退者が出たことを受け、2020年度入試から出願資格の文言を「早稲田大学本庄高等学院を第一志望とし、合格した場合は入学を確約できる者」と変更したが、α選抜とI選抜それぞれ1名ずつの辞退者が出た。

3.1.4 入学試験

（ア）一般入学試験・帰国生入学試験

一般男子90名、一般女子73名、帰国生男子8名、帰国生女子7名となった。

（イ）α選抜（自己推薦入試）

志願者数は昨年度からは減少し、257名であった。男子96名、女子161名となった。

（ウ）I選抜（帰国生自己推薦入試）

志願者数73名で、合格者21名となった。

3.1.5 指定校推薦

一般指定校からの入学者は男子 11 名、女子 18 名（指定 34 校中）となった。
地元指定校からの入学者は男子 7 名、女子 8 名となった。

3.2 入学決定者の集い

2 月 19 日（土）オンデマンドで実施した。毎年、入学手続き者がある程度確定した土曜日に入学決定者を集めて、教員からの挨拶、国数英主任からのアドバイス、生徒によるミニコンサート、校歌歌唱指導、應援部からのエールの内容で実施しているイベントである。

今年度は対面での実施せず、上記の内容を録画し 3 月 8 日（終業式）までのオンデマンド配信とした。

4. 生徒への配慮

4.1 奨学金

2021 年度奨学金の状況は以下の通りである。

奨学金名	受給者数
朝鮮奨学会	1
茂木本家教育募金	2
古岡奨学会	3
埼玉県高等学校等奨学金	6
東松山市奨学資金	1
あしなが育英会	1
正覚会	1
公文公記念奨学金	3
長島記念財団	2
大隈記念	8
小野梓記念	13
早稲田カード	3
早大生協給付	4
本庄高等学院	3

4.2 保健室

4.2.1 健康診断

生徒定期健康診断：4 月 22 日（木）実施

新型コロナウイルス感染対策のため、耳鼻咽喉科検診は耳のみ実施し、鼻と咽喉については問診票による聴取となった。また、体育館内の密を防ぐため、1 時間に対象とするクラスを制限し、例年より時間をかけて全学年終了した。

4.2.2 課外講義

熱中症予防指導：6 月 9 日（水）実施

運動部を対象に、感染対策を行った上での熱中症予防指導を行った。

4.2.3 健康相談

保健室来室時に、必要に応じて健康相談を行った。特にメンタルに関する相談が女子に多く、時間を要するケースも複数あった。

4.2.4 感染症対策

昨年度から引き続き、新型コロナウイルスの感染症対策が中心となった。

緊急事態宣言やまん延防止等重点措置が適用される度、学事課からのガイドラインに沿って教育活動を行った。3 学期はオミクロン株の流行により、オンライン授業を余儀なくされ、2 月に 2 回のオンライン授業期間を設けることとなった。また、1～2 月に学級閉鎖を述べ 2 クラス実施し、1 クラスは臨時的に半日で下校させる措置をとり、学校内での感染拡大を防止した。

4.2.5 カウンセリング

週2回相談室を開室し、大学学生相談室所属のカウンセラーが生徒や教職員の相談に対応している。今年度は相談件数が増加し、予約を取りづらい状況となることもあった。次年度は相談枠を増やし、改善を図る予定である。

4.3 リハビリコンディショニングルーム

運動部サポートの一環として、週1回トレーナーによるスポーツ障害相談を実施した。11回開室で延べ10名が利用した。個別の運動障害に対し丁寧にリハビリ・トレーニングを指示して成果を得た。2022年度は生徒への周知を更に広く行い利用者数を増やしたい。また、早稲田大学本庄高等学院運動部育成プログラムとしてさらに設備を整え、充実したシステムに発展させたい。

4.4 共済見舞金

本学院では生徒の疾病・不慮の事故・災害等による医療費を相互扶助によって補助し、保護者の経済的負担を軽減することを目的に、独自の共済制度を設け、全生徒から年額5,000円を徴収している。2015年度から、より公平でわかりやすいシステムを目指し、現行制度の運用を開始した。これにより、本規程の所管箇所である早稲田大学学生部が大学生を対象に運営する学生健康増進互助会の基本的な考え方やルールに沿った医療給付制度となった。

2018年度、2019年度と2年続けて赤字の収支決算となったため、2020年度より財政健全化を目指し自己負担額の増加、給付額上限の引下げ、日本スポーツ振興センターとの併用不可、という制度改革を実施している。過去5年度分の支給実績は次の通りである。

年度	2017	2018	2019	2020	2021
支給人数(延べ)	791	916	891	451	423
支給人数(実数)	254	294	247	136	136
支給上限額到達者	6	11	11	4	5
支給金額(円)	4,146,464	5,092,429	4,910,736	1,915,688	1,925,249

4.5 学校安全管理

4.5.1 安全管理体制

本学院のキャンパスは浅見山とよばれる丘陵地にあり、85万平方メートルにおよぶ広大な敷地を有している。古墳群が点在し、オオタカ等の野生生物保護のため、環境保全の必要にも迫られている。そのような特殊な事情により、学校を外部から物理的に遮蔽する塀や門を設けることができない。そのため、日直にあたる教員が校地を巡回し不審者の侵入防止・発見に努めるほか、下校時刻の遵守指導を行っている。

また外部委託によるキャンパス管理室を設置し、24時間体制で巡回を行うなどセキュリティを強化している。キャンパス内外をつなぐ出入口や建物の開口部には防犯カメラを設置し、校舎にも最新の入退出管理機器を設置するなど監視体制も整えている。

本庄キャンパス全体としては、労働安全衛生法第19条第1項に規定される安全衛生委員会が設置され、本学院を含むキャンパス内各箇所から委員が選出されている。委員会は毎月定例で開催され、キャンパス内の安全衛生全般について報告や確認を行なっている。

また、4月には消防署の協力により防災訓練を実施し、災害発生時の避難経路の確認、防災意識の高揚を図った。

4.5.2 交通安全指導

例年通り4月に1学年を対象とて警察署による交通安全・防犯講話を実施した。近年、自転車通学の生徒は減少しているが、自らが加害者にも被害者にもなり得ることを踏まえ、継続して

交通安全への啓発を行なっている。自転車による通学経路を指定し、指導を続けている。電車通学の生徒については、電車通勤の教員が中心となって生徒の乗車状況を確認し、ホーム上での危険防止（歩きスマホの指導）等にあたっている。

4.5.3 防災訓練

全校生徒・教職員を対象とした防災訓練を毎年新年度早々に実施している。2021年度は4月14日（水）に大地震が起こったことを想定して実施した。

5. 生徒進路

5.1 進学学部

5.1.1 学部決定の方法

（ア）総得点方式

成績の上位者から順番に、希望の学部学科に推薦する。

（イ）G選抜方式

学部受け入れ枠の最大 10%を上限として、学業成績だけでなく思考力や判断力、意欲、主体性など多面的評価によって学部推薦を決定する。

（ウ）日本医科大学への推薦

推薦条件を満たした希望者から、成績や諸活動および意欲などを総合的に評価し推薦者を決定する。本年度は3名が入学した。

2022年度入学推薦枠数/2022年度学部進学者数(学部・男女別)

学部	学科	専修	2022年度入学推薦枠数		2022年度学部進学者数			
			学科定員	学部合計	計	男子	女子	学部合計
政治経済学部	政治学科		27(±3)	77	25	4	21	77
	経済学科		35(±3)		38	23	15	
	国際政治経済学科		15(±3)		14	7	7	
法学部			46	46	42	33	9	42
文化構想学部	文化構想学科		25	25	25	9	16	25
文学部	文学科		19	19	19	13	6	19
教育学部	教育学科	教育学専修	5	44	2	0	2	18
		生涯教育学専修	4		1	1	0	
		教育心理学専修	2		1	0	1	
		初等教育学専修	1		1	1	0	
	国語国文学科		8		1	0	1	
	英語英文学科		8		2	2	0	
	社会科	地理歴史専修	6		2	2	0	
		公共市民学専修*	10		1	1	0	
	理学科	生物学専修	2		1	0	1	
		地球科学専修	2		1	0	1	
	数学科		5		2	1	1	
	複合文化学科		4		3	2	1	
商学部			36	36	36	18	18	36
基幹理工学部 ※2年進級時に学科選択	Mathematical Sciences			43	0	0	0	29
	学系Ⅰ		10		3	2	1	
	学系Ⅱ		28		19	14	5	
	学系Ⅲ		7		7	5	2	
	Computer Science and Communications Engineering				0	0	0	
創造理工学部	建築学科		13	38	13	2	11	34
	総合機械工学科				2	1	1	
	Mechanical Engineering		8		0	0	0	
	経営システム工学科		8		8	6	2	
	社会環境工学科		6		6	4	2	
	環境資源工学科		5		5	4	1	
	Civil and Environmental Engineering		11		0	0	0	
先進理工学部	物理学科		5	36	1	0	1	15
	応用物理学科		6		1	0	1	
	Physics				0	0	0	
	化学・生命化学科		4		3	1	2	
	応用化学科		7		0	0	0	
	Chemistry				0	0	0	
	生命医科学科		4		4	3	1	
	電気・情報生命工学科		14		6	4	2	
	Bioscience		18		0	0	0	
社会科学部	社会科学科		20	23	20	12	8	21
	TAISIプログラム		3		1	1	0	
人間科学部	人間環境科学科		5	14	0	0	0	4
	健康福祉科学科		5		1	1	0	
	人間情報科学科		4		3	2	1	
スポーツ科学部	スポーツ科学科		8	8	1	1	0	1
国際教養学部	国際教養学科		16	16	15	7	8	15
日本医科大学医学部			3	3	3	2	1	3
合計			428		339	189	150	339

6. 教員の活動

6.1 教員の研究活動

6.1.1 特別研究期間

本校では毎年 3 名を上限に、最長 1 年間の特別研究期間（サバティカル）を取ることができる。

2021 年度は 2 名の予定であったが 1 名はコロナ禍で海外渡航が容易でないため、断念せざるを得なかった。

6.1.2 研究紀要

本学院専任教員、非常勤講師等が執筆した研究論文や調査報告を掲載し、年 1 回刊行している。2021 年度は研究紀要第 40 号を発行した。掲載論文は 4 本で例年に比してかなり少なかった。コロナ禍により海外・国内の研究調査が非常に困難であったことも影響したと考えられる。

- ・モノイダル（余）閉圏上の淡中-クライン双対について
- ・教授学的状況理論を用いた対数の性質を教授意図した授業実践の分析
- ・遼陽壁画墓一覧
- ・Excel による乱数シミュレーションで統計分布をつかむ

6.1.3 教員の研究成果

【課題研究】

- ・早稲田大学教育総合研究所兼任研究所員（部会主任：赤塚祐哉）「研究課題（B-13）：批判的思考と英語運用力を育成する授業開発ーエリクソンの概念学習とエルダー・ポールの分析的質問に着目してー」

【論文】

- ・赤塚祐哉, 木村光宏, 菰田真由美「国際バカロレアプログラムにおける批判的思考指導モデルの検討ー教育学諸理論の関係性と教師の語りに着目してー」『早稲田教育評論』36(1) (査読付き)
- ・赤塚祐哉「批判的思考を育成する英語教材開発の試みー国際バカロレアの批判的思考指導の枠組みに着目してー」『言語学習と教育言語学』2021 年度版 (査読付き)
- ・三崎良章「遼陽壁画墓一覧」『早稲田大学本庄高等学院研究紀要』40
- ・成瀬政光。教授学的状況理論を用いた対数の性質を教授意図とした授業実践の分析。早稲田大学本庄高等学院紀要 教育と研究, (40), 37-50。
- ・峰真如「Excel による乱数シミュレーションで統計分布をつかむ」『教育と研究』40, 103-114 (2022 年)
- ・太田洋平「モノイダル（余）閉圏上の淡中-クライン双対について」早稲田大学本庄高等学院紀要 教育と研究, (40), 1-36
- ・細喜朗・栗原文子「J-POSTL を活用した英語の授業改善:2 年間の異文化理解授業の振り返り」JACET 言語教師教育 Vol.9(No. 1) 84-98 2022 年 3 月 (査読付き)
- ・Quantum sensing of the electron electric dipole moment using ultracold entangled Fr atoms T Aoki¹, R Sreekantham, B K Sahoo, Bindiya Arora, A Kastberg, T Sato, H Ikeda, N Okamoto, Y Torii, T Hayamizu, K Nakamura, S Nagase, M Ohtsuka, H Nagahama, N Ozawa, M Sato, T Nakashita, K Yamane, K S Tanaka, K Harada, H Kawamura, T Inoue, A Uchiyama, A Hatakeyama, A Takamine, H Ueno, Y Ichikawa¹, Y Matsuda, H Haba and Y Sakemi, Quantum Sci. Technol. 6 (2021) 044008
- ・Development of Ultracold Francium Atomic Sources Towards the Permanent EDM Search, Tomohiro Hayamizu , Hiromitsu Haba , Keisuke Nakamura , Takatoshi Aoki , Hiroki Nagahama , Kazuo S. Tanaka , Naoya Ozawa , Miki Ohtsuka , Yasuhiro Sakemi , Few-Body Syst (2022) 63:11

【書籍】

- ・高井寿文（2021）地図を用いた定位と伝達。日本地図学会（監修）、森田 喬（編集代表）『地図の事典』朝倉書店（分担執筆）
- ・高井寿文（2022）外国人がとらえた日本の都市空間。岡本耕平（監修）、阿部康久・山元貴継・土屋 純（編集）『論文から学ぶ地域調査』ナカニシヤ出版（分担執筆）
- ・半田亨（2022）「世界とつながる科学教育」、田中博（編著）、堀江未来・武田菜々子・半田亨・松浦紀之（分担執筆）、学文社
- ・細喜朗（分担執筆）、浅野 雄大・芹澤 和彦（編集代表）『中学校・高等学校 4 技能 5 領域の英語言語活動アイデア』明治図書

【口頭発表】

- ・Yuya Akatsuka, “Concept-based Curriculum Fostering Critical Thinking Skills”, The 25th Conference of Pan-Pacific Association of Applied Linguistics, Korea University(online), 20 August 2021
- ・三崎良章「五胡十六国ー三燕と前秦を中心にー」 国際日本文化研究センター日本古代史

研究プロジェクト、2021年9月28日、オンライン（招待あり）

- ・ 成瀬政光. 状況理論による対数関数の授業分析と設計. 日本数学教育学会第103回全国算数・数学教育研究(埼玉)大会, 2021.08.22(オンライン)
- ・ 成瀬政光. 高校数学における目的づけられたSRPの実践. 日本数学教育学会第54回秋期研究大会, 2021.10.30, 広島大学 (オンライン)
- ・ 太田洋平. 「準ホップ代数のハイゼンベルグダブルについて」. リー代数・ホップ代数および関連する話題, 2022年1月8日～10日, 富山大学
- ・ 太田洋平. 「ハイゼンベルグダブルの一般化とその性質」. 第18回数学総合若手研究集会～数学の交差点, 2022年3月1日～4日, 北海道大学 (オンライン)
- ・ 根本裕介. 「Hesse cubic 曲線のレギュレーターと超幾何関数」. 第18回数学総合若手研究集会～数学の交叉点～, 2022年3月1日～4日, 北海道大学 (オンライン)
- ・ 根本裕介. 「On the K2-regulator of the Hesse cubic curve and hypergeometric functions」. 日本数学会, 2022年3月28日～31日, 埼玉大学
- ・ 影森徹. 「生徒を魅了する科学実験」NEW EDUCATION EXPO 2021 2021年6月5・12日（招待）
- ・ 細喜朗. 『CLILの30のコアを活用した授業実践とその考察—英語科と情報科の教科等横断型の授業—』 J-CLIL 第25回例会（招待）2021年5月22日
- ・ Yoshio HOSO, "A Proposal for Adapting the Question Formulation Technique (QFT) to Focus Attention on Logicality in Essay Writing in Japanese Classrooms", 19th AILA World Congress (online), 15th, August 2021
- ・ 細喜朗・橋本懂子 『高校における論証教育の試み—その方法と結果について』教育目標・評価学会第32回大会 福井大学 (オンライン) 2021年11月28日
- ・ 細喜朗・橋本懂子 『ツールミンモデルを利用した高校における論証教育の試み』教育の国際化研究会 2021年度第6回研究会 (オンライン) 2021年12月19日
- ・ 半田亨・田中博・堀江未来・武田菜々子・松浦紀之、Symposium "Education Through Science Fairs", 2021.6.19に関する座談会「国際サイエンスフェアを日本中の学校へ」、2021.12.28

6.3 社会活動

6.3.1 学会役員

- ・ 日本国際バカロレア教育学会・理事
- ・ 日本英語教育学会・編集委員
- ・ 物理教育研究会 運営委員

6.3.2 学外委員

- ・ 「学力向上のための基盤づくりに関する調査研究」(文部科学省委託事業、実施主管：愛媛大学教育学部、取組実施主幹校：愛媛大学教育学部附属小学校) 学力向上推進協議会における国際バカロレア学識経験者
- ・ 本庄市行政不服審査会委員

6.3.3 学外講師・出張授業等

- ・ NHK ラジオ高校講座「コミュニケーション英語Ⅱ」講師
- ・ 外国人教員研修留学生を対象とした現職教員による講演会「日本の高校教育の現状と課題」(筑波大学人間系)
- ・ 公立大学法人高崎経済大学非常勤講師

6.3.4 教科書等の執筆

- ・ Enrich Learning English Communication I (東京書籍) 編集協力者
- ・ All Aboard English Communication I (東京書籍) 編集協力者
- ・ 『地学基礎』高等学校理科教科書(啓林館) 編集協力者

- ・『わたしたちの地理総合 世界から日本へ』文部科学省検定教科書 高等学校 地理歴史科用（二宮書店）執筆者
- ・『わたしたちの地理総合 世界から日本へ』文部科学省検定教科書 高等学校 地理歴史科用 教師用指導書朱書き編（二宮書店）執筆者
- ・「情報の科学」「情報Ⅰ」、高等学校情報科教科書、日本文教出版 執筆者
- ・『物理基礎』文部科学省検定教科書（実教出版） 高等学校理科教科書 執筆者

6.3.5 外部資金の獲得

- ・独立行政法人日本学術振興会科学研究費補助金奨励研究。高校数学における探究活動の教授学的状況理論を用いた分析と授業設計(21H03988, 180 千円)。
- ・独立行政法人日本学術振興会科学研究費補助金奨励研究。自然環境の測定による数理的判断能力の育成を目的とした教材開発と授業実践 (21H03947, 300 千円)
- ・公益財団法人 中谷医工計測技術振興財団科学教育振興助成、「児童と考える川の環境」、300 千円
- ・荻野国際交流支援基金 (5000 千円：早稲田大学校友の荻野修様より、主に海外からの受け入れ留学生支援のための5年分の活動基金として)
- ・JST さくらサイエンスプラン (6000 千円 (2 プログラム))、2021 年度オンライン交流に変更のため、助成なし

6.3.6 その他

- ・文部科学省国際バカロレアコンソーシアム事業 IB の教育効果に関する調査研究事業 研究分担者（研究代表者：筑波大学教授・井田 仁康）
- ・こども大学本庄 学長
- ・図書館運営 図書委員長

7. 教育研究施設

7.1 学内施設

7.1.1 教室

教室は普通教室 23、ゼミ室4、理科実験・講義室 5、情報処理室2、美術室 1、体育講義室 2、地理演習室 1、音楽教室1、家庭科調理室1、メディアルーム1、CALL教室 1、大教室1 で構成され、各教室にはIT機器とスクリーンが設置されている。

7.1.2 稲稜ホール

稲稜ホールは学年集会や、各学年対象の健康教育講演会、外部有識者による特別講演会、その他各種様々なイベント、音楽の授業やブラスバンド部・グリー部の活動、演劇部・軽音楽部等のミニコンサート等に常時利用されるほか、学外の機関の利用にも供している。それらを含め年間の施設利用回数は、2018年度は100回を超えていた。

本学院の教育活動上極めて重要な役割を果たしていたが、2020年度はコロナ禍の中、利用のガイドラインについて感染状況に応じた対応をせざるを得なかった。厚労省のコロナ対応に関する換気の基準は満たしている。

7.1.3 CALL教室

PC教室に隣接した46名対応の教室である。教卓周辺はスクリーンを使った発表に適した広めのスペースがあり、2名1組の机にはPC、カメラ、マイク付ヘッドホンが備わっている。授業の展開に応じてアクティブラーニングや音声・文書ファイルの配布と回収が可能である。放課後は事前予約制で、発表リハーサルや課外講義、説明会やワークショップにも活用されている。2019年以前は、授業以外の活用事例としては、始業前30分間の「英語朝練」や英語の学内公開授業（ポスターセッション）会場としての使用例があった

7.1.4 コンピュータ・インターネット環境

現校舎を使用するようになってから、PC 室 2 室（46 名対応）で多様な授業や課外活動を展開している。PC 室は教科「情報」、情報系の選択科目以外に、情報環境を必要とする様々な教科で使用され、また、休み時間・放課後は生徒に開放され、創作活動・検索活動に役立てている。また全ての教室に LAN の情報コンセントとプロジェクター・スクリーン・書画カメラが設置されている。また校内 3 カ所に無線 LAN のポイントがあり、情報コンセントのない場所でも WiFi でノート PC やタブレット、スマホ等でインターネットへの接続が可能である。

このような環境のため、ノート PC やタブレットを持参する生徒が増えている。2020 年度 2021 年度はコロナ禍の中で、不特定多数が使用する学校の端末を使いたくないという生徒が多いのか、自分の PC を持参する生徒が増えた印象である。校内の至る場所で課題や調べ物に役立てているようである。

ネットワークの帯域幅にもストレスはない。コロナ禍によるオンライン授業が増えたことや、不特定多数の生徒の触れるキーボードを嫌う意識から、自身のノート PC やタブレットを持ち歩く生徒が大幅に増えた。

今後は PC 室のデスクトップパソコンを使って授業を行う時代から脱却する動きをしなくてはならないと思っている。次年度より、BYOD(Bring Your Own Device)に完全移行する方針である。

7.1.5 体育館

2020 年 2 月に完成した体育館は、従来の学院体育館より広いメインアリーナと、部室やトレーニング室、多目的室等が併設された施設である。それ以前より生徒の移動時間も大幅に削減され、冷暖房も完備されたため、より一層充実した授業や部活が実施できている。

7.1.6 共通教室棟体育館

昨年度より、大学学生課所管本庄セミナーハウスの施設となったが、主に雨天時の体育や部活動で使用申請を行い、活用している。

7.1.7 サッカー場

サッカーコート 1 面を十分に確保できる広さであり、それを活かしたサッカーの授業展開ができています。授業や球技大会等行事、クラブ活動と年間を通しての使用頻度は非常に高い。水はけは非常に良好である。

7.1.8 ラグビー場・陸上競技場

陸上競技、ラグビーの授業展開が十分にできる広さである。体育祭、稲稜祭、球技大会、マラソン大会等の行事、また災害時の第一避難として定めており、その使用頻度は高い。クラブ活動では、陸上部、ラグビー部が使用している。野球場野球部の活動以外では、主にソフトボール、ゴルフの授業で使用している。各種目授業を十分に展開できる広さである。マラソン大会ではスタート地点とし、クラブ活動では、硬式野球部が使用している。

7.1.9 テニスコート

テニスコート 6 面（クレイ 4 面・砂入り人工芝 2 面）は、テニスの授業と、クラブ活動では硬式テニス部とソフトテニス部が共用している。

7.1.10 図書室

図書室を頻繁に利用する生徒はまだ一部に限られていると思われるため、より多くの生徒に図書室を有効活用して貰えるよう、学内関係個所と協力しつつ所蔵資料の充実、図書室内の環境整備などに努めたい。

元衆議院議員の河野洋平氏より継続的に書籍の寄贈があり、特設コーナーを設けている。

7.1.11 食堂

食堂はホールとパンショッパから構成されている（運営は早稲田大学生協に委託）。

食堂の座席数は442であるが、特にピーク時間帯の一時的な密状態を避けるために、座席数を半分に制限するとともに、相向かい席の中央には透明パーティションを設置した。その他の付帯設備としては、自動販売機4台、給茶機3台、食券販売機4台が設置されているが、給茶機の利用は停止した。

7.1.12 その他

11月4日に3年生全員を対象に実施したGTEC試験の会場や生徒の待機場所として、93,94号館（早稲田リサーチパーク）を利用した。他の利用者との混乱を避けるため、施設入口等には管理者を配置し、生徒への注意喚起を行なった。

7.2 スクールバス

今年も、昨年度と同様にオンライン授業、分散登校、全員登校の期間があり、また部活動の実施時間帯や最終下校時刻が変動していたため、常にバスのダイヤが変更されている状態であった。また、コロナウィルス感染症予防のため、バスの密な環境を避けるため、通常6台で運行しているスクールバスを7台運行とした。遅延があった際には、Moodleのアナウンスメントで全校にメールによる一斉連絡で対応を行った。雨天時は自転車通学の寮生がバスに切り替えることもあり、年に数回だけ生徒全員が朝のバスダイヤで乗り切れないことがあったため、来年度の課題としたい。

7.3 生徒寮

7.3.1 早苗寮

今年度は、引き続き新型コロナウィルス対策を含む寮内ルールの下で寮運営を行った。具体的には、不要不急の外出制限、食堂テーブルのパーティション設置や利用制限、大浴場の利用時間設定、他室訪問禁止などであった。

クリスマス会や防災訓練は、感染対策のために人数を減らし、時間を短縮するなど工夫をしながらの実施となった。

感染対策のため、寮内での会話や交流が希薄となってしまっているため、感染対策を講じながら実施できる交流を検討し、寮生同士の関わりを増やすことを来年度の目標とする。

7.3.2 梓寮

早苗寮と同様に、今年度も、引き続き新型コロナウィルス対策を含む寮内ルールの下で寮運営を行った。昨年度は実施できなかった防災訓練を、各班リーダーが実施して、防災意識を高めることができた。

新型コロナウィルスの影響で、自治会行事はクリスマス会のみであった。感染対策をしっかりと守りながらも、楽しそうに寮生同士で交流をしていた。

今年度は、インドからの留学生1名が11月～3月に滞在して、歓迎会ではインドのイベントを紹介してくれるなど交流を深めることができた。

8. 学外との協力・連携

8.1 保護者との連携（保護者の会）

本校ではPTAを持たない。代わりに保護者の会が運営されている。PTAとの違いは、保護者の会は、教員がその動きに関わらずに、会独自に活動していることである。保護者会全大会と保護者会主催の総会を例年、年2回実施している。第1回目は6月初旬の土曜日放課後に開催する。クラス幹事決定と1年間の学習や行事に対する諸注意が内容の基本である。第2回目は12月の冬季休業に入った最初の日曜日に実施する。クラスや行事の状況報告、進級進学に向けた指導が内容の中心となる。3年生では、ミスマッチのない学部選択に向けた進路指導のため、この保護者会においてクラス組主任との間で三者面談が行われる。両方とも、同時に寮の保護者会も

並行して開催される。

昨年度は、コロナ禍対応のため学校に余裕がなく、6月に予定していた第1回目を9月20日（日）にオンラインで実施した。第2回目は予定通り12月13日（日）に実施したが、これもオンラインで行った。面談もオンラインで行った。全大会における質疑、総会の決議事項における質疑や採決において、オンラインだとやりにくい側面がある一方、対面では経費や時間がかかるため参加が難しい、海外や遠距離在住の保護者の参加が可能になること、特に個人面談が簡単にできることからオンラインの良さもわかった。

また、例年入学式の後で実施している保護者会や学校のシステム概要の説明会が、入学式中止のため実施できなかった。このことは、その後1年生クラス幹事の選出のトラブルや成績や出欠の扱いに対するクレームや質問が多くなることにつながった。

今年度もコロナ禍の中、6月5日（土）に対面とオンラインのハイブリッド開催を予定していた保護者会は9月26日（日）に延期となった。1年生2年生の保護者は校舎見学できていないことを考え、6月27日（日）に見学会を予定していたが、それもまん延防止法の延長により9月26日（日）に延期にした。秋から年末にかけての感染状況低下により、第2回保護者会は12月19日（日）に対面とオンラインのハイブリッド開催で実施できた。

昨年の反省を踏まえ、なかなか実際に自分の目で学校の様子を知ることができないこと、対面での保護者会が制限されているため学校に直接意見を言う場面がなかなか持てないことを考慮し、10月27日（水）19時～20時にオンラインの臨時保護者会を開催した。ここでは、予め質問・意見を連絡してもらい、学院長の挨拶の後、学院長が1つ1つ質問に答える形を取った。また、その場で直接の質問も受け付けた。

8.2 卒業生との連携（同窓会・キャリア教育）

2021年度は2020年度同様、コロナ禍により、稲稜祭における出店や記念グッズ作成、卒業生への説明会など、同窓会活動の場面が持てていない。

卒業生との連携利用として、本校ではキャリア教育の充実が上げられる。凡そ月1度土曜日放課後に実施しているキャリアデザイン講座、毎年9月の2週に渡って実施するキャリアウィークでは、各界で活躍しているOB/OGを講師として招き、職業について講義をしてもらっている。OB/OGにお願いする利点は、高校生活・大学生活が本校生徒とダブるために、どのような高校・大学生活を送り、どのように職業選択を行ったのかという時系列を自分のこととしてイメージしやすいことがあげられる。

8.3 地域との連携

本庄学院は1982年の開校以来、教員の持つリソースや学校設備・器具を用い、地域の人たちに対して講習会や特別講義を実施してきた。本庄キャンパス内に本庄プロジェクト推進室ができてからは、連携を行い、多様な講座を地域に公開している。2018年度より、本庄市内小学校へ出張授業を行うプロジェクトが開始されたが、2020年度はコロナ禍によりすべて中止となった。また、生涯教育を目的とした本庄市が主催する市民総合大学、こども大学ほんじょうにも講師・学長の立場で協力をしている。これも2020年度はすべて中止となった。

2021年度はwith コロナにスタンスをシフトし、可能な限り実施する方向で活動を行った。小学校の支援プログラムでは、11月8日（月）に秋平小（川と海の環境）、11月12日（金）に西小学校（チアダンス）、11月16日（火）に東小学校（川と海の環境）、12月8日（水）に南小学校（川と海の環境）、12月7日（火）に中央小学校（目の不思議）の講義を本校生徒が行った。また、12月12日（火）の共和小学校（国際理解授業）では本学院で学ぶ留学生が母国インドの

紹介を行い、他の生徒2名が通訳としてアシストした。市民総合大学でも7月4日（日）「100万年前の虫を探そう〜コハクの不思議〜」、7月10日（土）「空気の力を体験しよう」、7月11日（日）「茶道の基本を教えます」を実施した。夏休みに予定していたこども大学ほんじょうは延期の上、中止となった。



小学校での授業の様子

学校が学校だけで閉じている時代は終わり、多様化・グローバル化の時代の中、学校は教育リソースを学外に求めより効果的で高いレベルの教育を目指すとともに、地域の文化的拠点にならなくてはならないと考えている。

8.4 大学・他附属校との連携

本庄高等学院は早稲田大学の附属校であるため、大学との連携プログラムが豊富である。

8.4.1 アントレプレナーシップ育成事業

早稲田大学はアントレプレナーシップ育成重視し取り組んでおり、これを附属校に広げる動きが2021年度に開始された。2月28日（月）14時～16時にオンラインで3年生（大学新入生）希望者に向けて説明会を実施した。参加者は11名であった。

今後は、大学および本庄市の協力を得ながら、在校生に育成プログラムを広げる方針である。

8.4.2 国際部との連携講座「留学のススメ」

2018年度より大学国際部との連携で、特に大学進学後における留学への理解を進めるべく、特別講座を実施している。2020年度よりオンライン開催を余儀なくされているが、オンラインであれば保護者の参加も可能であり、対面とは異なる効果があることを感じている。

2021年度は以下の通り実施した。

- ・ 11月4日（木）18:30～19:30
- ・ 11月11日（木）18:30～19:30
- ・ 3月4日（金）18:30～19:30

8.4.3 企業連携ワークショップ

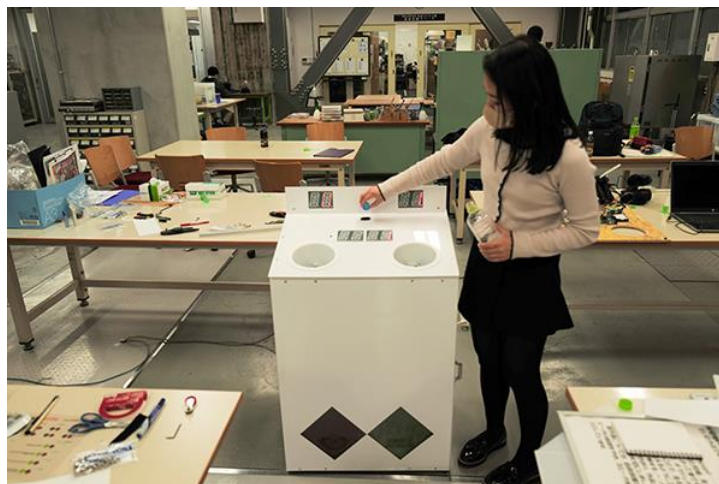
本庄学院では企業との連携プログラムを推進している。インターンシップにつながることで、学校で学んだ基礎知識を現場で実践する際の困難を経験することを期待している。

2021年度特筆すべきはサントリーとの連携プログラムである。早稲田大学がサントリーとの

連携協定を結んでいることから、オファーを得た。テーマは『『ボトル TO ボトル』 水平リサイクルを考える～身近な事例を通して SDGs と向き合う～』である。参加生徒は 12 名である。

10月12日（火）16時より本校情報科・物理科教員より、それぞれ「キャッチコピーの作り方」「長く使われる道具の条件」の講義がなされた。翌13日（水）14時よりサントリー側から、このプログラムについての説明と課題が紹介された。それを受け、10月22日（金）に生徒からそれぞれプレゼンテーションの形でキャッチコピーとリサイクルボックスのアイデアが紹介された。キャッチコピー・リサイクルボックスに対して最優秀賞を各1名、早稲田大学側、サントリー側から特別賞が各1名発表された。

このプログラムはここで終了する予定であったが、その後リサイクルボックスを具現化することになり、早稲田大学ものづくり工房の協力を得て制作を行い、3月24日に校内設置のお披露目を行った。



ものづくり工房で作成されたオリジナルリサイクルボックス

8.4.4 WASS(Waseda Affiliated Schools Symposium)の開催

附属校である両高等学院の結びつきと相互発展を目的として2021年に開始された標記シンポジウムであるが、今年度は昨年度の反省を踏まえ、活動日・参加者を増やす形で継続された。成果発表は2022年2月6日（日）に行われた。成果発表時にはメンバーの他に両校教員・大学高大接続推進課職員が参加した。今年度は、優秀発表に対して表彰も行った。

8.4.5 本庄早稲田の杜ミュージアムとの連携プログラム

本庄早稲田の杜ミュージアムは早稲田大学 5 番目の博物館として、同キャンパス内に2020年10月に開館した。本庄市近辺で発掘された考古学資料とともに、定期的に入れ替えながら早稲田大学所蔵の文化財をテーマ展示している。

2021年度より、本校生徒が学芸員見習いとして休日に、博物館業務の手伝いをするプログラムを8月より開始した。業務は、市民に向けた埴輪作り・勾玉作り・土器洗いなどのワークショップの補助、展示物入れ替えの補助、お客様に対する説明ボランティア等である。



勾玉づくりワークショップの様子

8.4.6 古墳の物理探査活動「墳Q」

早稲田大学考古学資料室・文学部・本庄市・高エネルギー加速器研究機構と連携した古墳の物理探査活動「墳Q」活動と題して学校の周りにある古墳を地中探査レーダーや宇宙線(宇宙から降り注ぐ自然放射線)を用いて透視しようというプロジェクトを継続的に実施している。10人ほどの生徒が、月に一回程度勉強会、その他は古墳班、ハードウェア班、ソフトウェア班に分かれて活動している。考古学資料室や本庄市の協力の下、文献調査、古墳巡検、研究者と共に宇宙線透視装置OSECHIの開発、大学スタッフや大学院生の指導の下古墳の地中レーダー探査等を継続的に行っている。



古墳の地中レーダー探査の様子

8.4.7 人間科学部本庄高等学院連携プロジェクトの開催

早稲田大学人間科学部との連携活動を継続的に行っている。

本年度は、学院生希望者に向けて、人間科学部の加藤麻樹教授、村野良太助手らによる、人間工学をテーマとした測定体験講座を行った。

2021年11月：センサーを内蔵した幼児の頭部の模型を用いた地面の衝撃の測定、自分の筋力がどれくらい使われているのかという筋電測定、歩く姿勢を詳細に計測し靴による違いを検証する体験会を実施した。

2021年12月：衝撃を吸収する素材の比較実験、認知機能や感覚の不思議について体感する

実験を行った。



芝生の衝撃を測定する演示実験の様子

8.4.8 環境エネルギー研究科（大学院）との連携

同キャンパス内にある大学院である環境エネルギー研究科の「環境・エネルギー学演習B（地域演習・密着活動）」の講師を務めている。また、同研究室から卒業論文に対する指導をいただいている。

8.5 企業との連携

ほんじょう FM との連携が 11 月 4 日（木）より開始された。木曜日の 17 時～18 時枠を受け持つ形で、テスト期間を除く木曜日に本校生徒 4 名がパーソナリティを務めている。

8.6 募金

2021 年度の教育振興資金寄付件数は 75 件、寄付金額は 13,620,000 円であり、その他にも本庄高等学院指定寄付や部活動指定寄付を 15 件、8,540,326 円を受け入れた。

今後も引き続き、さらなる募金獲得に向けて今まで以上に幅広く活動を行なう必要がある。

9. 管理運営

9.1 教員

9.1.1 教諭会

2021 度は定例教諭会が 11 回（入試判定会、卒業・進級判定会は除く）、臨時教諭会が 28 開催された。例年臨時教諭会は 10 回程度であったが、新型コロナウイルスへの対応のために 3 倍ほど回数が増えた。

今年度は、入試や人事関係以外は感染に配慮し、Zoom による TV 会議で実施した。

なお、臨時教諭会には生徒指導を議題とする会議が複数回含まれる。

9.1.2 各種研修

教員には各種研修が義務付けられている。

情報セキュリティセミナー・ハラスメント防止セミナー・学術研究倫理セミナー・ダイバーシティ&インクルージョンセミナーをまとめた教職員セルフマネジメントセミナーはオンライン上で試験の形で、全問正解の合格が義務付けられている。

また今年度は、6 月に教諭会に先立ち、ハラスメントセミナーを実施した。

9.2 委員会

2021年度は、それ以前の委員会活動の反省を含め、昨年に続き大幅な改編・統廃合を行ない、校務分掌のスリム化、教員の業務量の軽減化を目指した。以下に、各委員会の検討事項及び取り組みを紹介する。おおよそ、一人の教員が2委員会を兼ねることになる。

委員会	構成	メンバー
教科主任会 委員長：教務担当教務主任	教員 8、教務 2、職員 3	教科主任、教務担当教務、事務長、職員
学年主任会（奨学生、生徒表彰選考） * 委員長：教務	教員 3、教務 1、職員 1	学年主任、生徒担当教務、養護教諭、事務長
生徒活動支援委員会・人権教育委員会（生徒会・稲稜祭・生徒指導、いじめ防止委員会兼務）* 委員長：教務以外	教員 8、教務 2、職員 1	各学年 2、組主任外 3、生徒担当教務、職員
安全委員会（体育行事、保健、その他安全配慮） * 委員長：教務以外	教員 8、教務 1、職員 1	体育 5、養護 1、全教科 3、生徒担当教務、職員
寮委員会* 委員長：寮主任	組主任外、教務 2、職員 1	組主任外 養護教諭 1、寮主任 2、生徒担当教務 2、職員
広報・出版委員会（杜・紀要）* 委員長：教務	教員 1、教務 1、職員 1	全教科 1、教務 1、職員
●入試委員会 * 委員長：入試主任	教員 8、教務 1、職員 2	全教科 1、入試主任、教務担当教務、職員
進路指導委員会（各種セミナー、卒論報告会） * ●委員長：教務以外	教員 8、教務 1、職員 1	各学年 2、組主任外 3、教務担当 2、職員
●留学・海外交流委員会 * 委員長：教務以外	教員 8、教務 1、職員 2	全教科 1、英語 1、教務担当教務、職員
図書委員会	教員 1、教務 1、職員 1	司書教諭 1、職員
学校評価運営委員会 * 委員長：教務以外	学院長、教務、職員 1	学院長、事務長

※ ●は2年継続

9.3 教科別教員構成

教員の教科別・年齢別・男女別構成は次の表の通りである。

教科	専任教諭	非常勤講師	合計
国語科	6	6	12
地理歴史・公民科	6	13	19
理科	6	9	15
数学科	7	5	12
保健体育科	5	5	10
芸術科	1	3	4
英語科	9	8	17
情報科	1	4	5
家庭科	1	1	2
第二外国語	0	4	4
養護	1	0	1

合計	43	58	101
----	----	----	-----

9.4 持ち時間数

21年度の教員の平均授業担当時間数は次の通りである。20年度から大きな変動はない。

- ・ 専任教員 13.8 時間（除長期欠勤者・特別研究期間適用者・養護教諭）
- ・ 役職者以外 15.1 時間
- ・ 役職者（教務）8.0 時間
- ・ 非常勤講師 5.9 時間

9.5 教員構成

9.5.1 年齢別構成

資格	人数	21～ 30 歳		31～ 40 歳		41～ 50 歳		51～ 60 歳		61～ 70 歳	
		人数	比率	人数	比率	人数	人数	人数	比率	人数	比率
専任教諭	43	2	5%	13	30%	13	30%	7	16%	8	19%
非常勤講師	58	31	53%	4	7%	5	9%	9	16%	9	16%
全体	101	33	33%	17	17%	18	18%	16	16%	17	17%

9.5.2 男女別構成

資格	人数	男		女	
		人数	比率	人数	比率
専任教諭	43	33	77%	10	23%
非常勤講師	58	44	76%	14	24%
全体	101	77	76%	24	24%

9.6 事務組織

事務所には、事務長の他、庶務係に専任職員 3 名、派遣社員 2 名が、学務係に専任職員 2 名、嘱託職員 2 名、派遣社員 2 名が配置されている（うち嘱託 1 名は理科準備室と兼務）。

専任および嘱託職員の嘱任、解任、配置転換は大学が行ない、派遣スタッフについては大学が契約窓口となり、人材サービス会社から派遣されている。

なお、施設の管理、スクールバスの運行管理、図書室の運営については業務委託を行なっている。

9.7 生徒の出欠席・成績処理

生徒の出欠席・成績管理のために、早稲田大学オープンソースソフトウェア研究所が開発した学院向け教務システム「SchoolN@vigat³」を導入している。同システムはリレーショナルデータベース化による情報の一元管理を特長とし、高度なセキュリティ保持や容易なデータ抽出・加工が可能になった。ユーザーインターフェースとしてウェブブラウザが採用されていることも、操作性や利便性の向上に役立っており、特に教員についてはデータの閲覧・編集がインターネット環境さえ整えばどこからでも可能になっている。

今後は、生徒の保健管理や課外活動管理などシステム化されていない事項を含め、ユーザーの希望を取り入れながらシステムの改善に取り組みたい。具体的な運用は以下の通りである。

- ・ 出欠席管理：科目担当者（教員）が毎時限の出欠席を入力した後、学期毎に組主任が欠席理由、成績通知表用所見を入力する。その他、学校行事など出欠席の一括入力が必要となる例外対応や集計処理は職員が管理する。
- ・ 成績管理：科目担当者が生徒の成績を入力した後、チェックから確定処理までを教員が行

³ 本庄高等学院用の出欠・成績管理システムである。各担当教員がその都度生徒の出欠や成績を入力し、その内容が指導要録・調査書等に自動的に反映される。

なう。成績通知表・指導要録・調査書等の成績関連帳票の自動出力が可能となっている。進学学部への調査書提出時など一括処理やデータ集計が必要な部分については、職員が編集・管理を行なっている。

9.8 教育実習

2週間（5月24日（月）～6月3日（木））および3週間（5月24日（月）～6月9日（水））の期間で6名の実習生を受け入れた。実習前の打ち合わせ会は5月13日（木）に行った。実習生は教壇実習を行いながら、学校現場の業務の体験に努めた。例年は実習期間中に体育祭や学年行事を実施して学校行事運営の実習も行っているが、今年度はコロナ禍により延期となってしまったのは残念であった。教育実習の反省会は2週間および3週間の実習最終日にそれぞれ実施した。

9.9 広報・連絡

9.9.1 学校活動の広報

広報誌として『緑風』と『杜』を発行している。

『緑風』は本庄高等学院の発行する広報誌で、6月と12月に発行している。紙面は教員や生徒が執筆するコラムや行事報告、クラブ活動の戦績報告などで構成されている。

『杜』は保護者の会「杜」編集委員会が年1回発行する保護者向け広報誌である。同委員会の自主的な取材・編集により、学院施設や生徒行事・トピックの紹介、保護者の会の活動報告などを掲載している。

オンラインでの広報は、学院ウェブサイト（<https://www.waseda.jp/school/honjo/>）を主なツールとして使用している。ウェブサイトでは学院生活に関するニュースや出来事を継続的に発信しており、ト

ップページの写真やリード文を見るだけで、本学院の最新の動向が伝わるようなページ運用を行っている。

課外活動のページでは、部活動ごとの活動概要（部員数・活動日・実績）を伝えるとともに、独自のWebサイトがある公認団体（クラブ）は、団体独自の情報発信を行なっている。こちらについては更新作業が実情に追いついていかないという難点がある。

今やウェブサイトは、学外の方に学校の基本的な情報、必要な手続・書式を得てもらう必須のツールとなっている。入試についても例外ではなく、本学院では入試の出願、合格発表、入学手続きの全てをウェブサイトを使用して実施している。

正確かつわかりやすい情報発信はウェブサイトの必要条件であり、このことに向けての体制づくりは今後も継続的に検討していく必要がある。現行のウェブサイトは約10年前に構築したものであるため、スマートフォン非対応であるなど、社会情勢にそぐわない部分も多い。そのため、次年度はウェブサイトの大規模な改修を検討している。

9.9.2 保護者・生徒への連絡・広報

本学院保護者に対して、迅速かつ確実に情報を伝達するため、FairCast（NTT データ(株)提供）システムを導入し、基本的に保護者のメールアドレスを登録している。災害・緊急時の情報伝達のみでなく、日常の事務連絡にも用いることで、保護者への迅速な情報発信を行なっている。

生徒に向けての連絡は、通常はLHRや授業時に行うことで問題ないが、警報発令時の連絡、台風通過後の学校からの連絡、生徒達に配布している学校生活マニュアル集「学院生活のしおり」によらない緊急連絡などはWebサイトを使って発信・連絡している。特に、2020年3月2日以降の一斉休校以降における、新型コロナウイルス感染拡大に伴う学校からの様々な情報提供はすべてWebサイトを用いてその都度こまめに行い、なるべく生徒・保護者の不安を解消することを目指した。

9.9.3 学校に寄せられる情報

学校に寄せられる情報としては、以下の種類がある。

- ・ 警察・消防署・本庄市からの情報不審者や災害状況などに対して注意を喚起する情報が寄せられることがある。必要に応じて、生徒に下校時の注意などを呼び掛けている。
- ・ 市民・公共交通機関利用者等からの情報市民の方、電車の乗客の方から、主として生徒に対する苦情が寄せられることがある。状況を詳しく伺い、必要があれば生徒に注意を与えとともに、ご指摘いただいた方に対しては真摯に対応するように努めている。

10. 学校評価

この学校自己評価については、2022年3月に項目ごとに担当者を割り振り、原稿を依頼した。保護者に向けたアンケートは実施できなかったが、10月にオンラインで臨時保護者会を開催し、2021年度学校運営に対する意見・感想を伺う場を設けることができた。この内容については、後述する。

10.1 自己評価

早稲田大学の各箇所は毎年次年度計画と実施報告を大学にすることが義務付けられている。以下は、2022年度 Waseda Vision150 会議への本庄高等学院の報告として大学へ提出した内容からの引用である。

10.1.1 2021 年度自己評価の主な内容

(ア)入試関連

- ・ 2022 年度入試に向けて

2020 年度以降の入試改革で実現した、一般入試・帰国生入試における願書の Web 化、2 次試験（面接）の廃止、入試会場の一本化（早稲田会場のみ）等を引き続き実施した。

- ・ 入試広報の効果的展開

学校説明会については、海外を含む遠方からの参加を容易にし、かつ新型コロナウイルス感染症対策の一環として、オンラインにより実施した（第 3 回目は対面・オンライン併用）。効率よく学院の特色や入試情報を伝えるとともに、在校生や留学生も積極的に協力することで、高校生活を身近に感じられたと考える。また、生徒寮の情報や相談の場を提供し、親元を離れての様々なバックグラウンドをもった生徒との共同生活の雰囲気も感じていただくことができた。

(イ)教育関連

- ・ カリキュラム改定

2022 年度からの新学習指導要領実施に向けた新カリキュラムが完成、時間割等も整備した。コロナ禍中、教育のオンライン展開などで積み重ねた経験とリソースは、ポストコロナでのさらに質が高く工夫された授業展開に活かされる。

- ・ 卒業論文指導の強化

第 2 学年から取り掛かる長い探求活動の中で、卒論指導とともにライティング、プレゼン教育についても注力した。また、オンラインによる卒論報告会を実施しました。今後、高大連携や地域連携による課外活動等を通じて関心を持ったテーマなど、さらに多角的な課題設定も期待される。

- ・ 学部推薦選抜制度の充実

高大接続の一環で、ミスマッチがなくモチベーションの高い生徒を学部推薦することを目指し、学部との教育活動の連携や情報交換を密にし、生徒がそれぞれの学部・学科へ

の理解をより深いものにできるよう努力した。大学キャンパスでの対面による学部説明会は感染拡大防止の観点から行わず、オンラインで実施した。同じくオンラインにより、第一線で活躍中の社会人等も交えてのキャリアデザイン講座を実施し、学部で何を学ぶか・どんな未来を描くかをイメージできるよう、進路指導の充実を図った。

2021 年度より日本医科大学への学校推薦制度を導入し、同大学におけるキャンパスツアー、模擬講義等を実施するとともに、医学の道を志すうえでの心構え等の指導も行った。

- ・ **地域連携プログラムの充実**

地元小学校との交流事業（総合的学習の支援）、本庄早稲田の杜ミュージアムでのワークショップ支援、ほんじょう FM での番組企画・出演等を実践した。とりわけ地元小学校との合同河川調査については、長年の継続的な取り組みが評価され、第 11 回毎日地球未来賞「SDG s 未来賞」、令和 3 年度彩の国埼玉環境大賞「優秀賞」を受賞した。

- ・ **企業連携プロジェクトの推進**

石油資源の循環による環境負荷の低減（CO2 排出削減）の啓発を目的に、サントリーとの共同プロジェクト「『ボトル TO ボトル』水平リサイクルを考える ～身近な事例を通して SDGs と向き合う～」を展開した。さらにこの取組の具現化として、「飽きられずに長く使ってもらえるようリサイクルボックス」創出プロジェクトを立ち上げ、コンペの結果選ばれた『3 秒チャレンジリサイクルボックス』を、理工学術院ものづくり工房と共同開発し、斬新なアイデアが詰まったリサイクルボックスを校内に設置した。企業、大学との協働作業を継続する中で、プレゼン、意思決定、ものづくり等の難しさも楽しさも経験することができた。

(ウ)国際関連

① 生徒の海外留学・海外派遣

2018 年度に、1 年間留学をしても高校 3 年間で卒業できる「第 2 種留学」制度を作ったものの、2020 年度においては、コロナの影響で留学希望者がいなかった。本年度はこの「第 2 種留学」により 1 名、また従来の「第 1 種留学」により 2 名が 1 か年の海外留学に旅立った。

② 留学生の受け入れと留学期間中の支援

インドからの留学生 1 名（「アジア架け橋プロジェクト」派遣生徒）を第 1 学年に迎えた。コロナ禍のため期間は本来の 1 年間から 11 月～3 月の半年間に短縮されたものの、1 年生の通常授業と部活動への参加の他に、地域交流、学内・学外の共同学習プロジェクト、インド文化の紹介活動（伝統舞踊披露、祝祭日の文化紹介、ヒンディー語講座）、日本各地への研修訪問等のプログラム、探究学習レポート執筆などに精力的に取り組んだ。学習支援には早稲田大学への指定寄付を原資とした「荻野奨学金」を活用し、大学内でも活用の優秀事例として紹介された。

④ 大学進学後の留学促進

大学進学後の留学を視野に入れている生徒、保護者向けには、国際部・留学センターとの連携による留学説明会を、本年度はオンラインにより実施した。

⑤ 国内外教育機関連携でのオンライン学習交流プログラム

コロナ禍でも留学や国際交流の意義を伝え、モチベーションを維持してもらうために、以下のとおり様々なオンライン企画を実施し、多くの生徒が参加した。

＊ 特に新入生に向けて国際交流の良さを伝えるために、ミニシンポジウム「国際交流への

いざない」を4月に開催した。

- * 韓国セロナム高校との学術交流シンポジウム（オンライン）を開催した。合同で6つのグループを作り、SDGsの各テーマについて、日韓の比較と問題解決についての提言を目指し、5か月間の共同研究を行いました。12月21日には最終目標であった国際フォーラムをZOOMで開催した。
- * Philippine Science High School - Eastern Visayas Campus ・タイの Princess Chulabhorn Science High School Trang との共同研究を行い、11月に開催された国際高校生科学シンポジウム Japan Super Science Fair (JSSF) 2021 で共同研究発表を行った。
- * 姉妹校である Singapore National Junior College (NJC) と文理両面での共同研究を行った。
- * 姉妹校であるタイの Mahidol Wittayanosorn School とのミニシンポジウムを12月に実施した。
- * タイ、シンガポール、フィリピンの3校、国内3校で、国際シンポジウム Asia Academic and Cultural Sessions（本学院主催）を2月に開催した。

10.1.2 2022 年度計画

（ア）入試関連

- ・ 願書の Web 化と 2 次試験（面接）の廃止、試験会場の一本化等の影響を分析し、2023 年度入試に活かすとともに、全国・世界から多様で資質の高い生徒を受け入れるため、引き続き入試改革に取り組む。
- ・ ポストコロナにおいても対面に加え、オンラインでの展開を含めた学校説明会や相談会を開催し、地方や海外から多くの受験生が参加できるようにする。また、地元指定校向けの説明会や出前講義にも対応します。早苗寮（男子寮）、梓寮（女子寮）の魅力作りを進め、PR 方法も工夫する。

（イ）教育関連

- ・ **多様で資質の高い生徒を受け入れる環境の充実**
学びの環境をさらに整備し、生徒同士が議論し、互いに啓発し合えるラーニング・コモンズのスペースを確保できるよう、教室以外も含めた有効活用策を検討する。また、親元を離れても、充実した学院生活を送ることができるよう、寮生に向けた独自の地域連携プログラムなど、引き続き魅力的な寮の在り方を工夫する。
- ・ **教育効果の高いカリキュラムの検討・多様で未来的な教育プログラムの展開**
2022 年度からの新学習指導要領実施に伴い、新カリキュラムの整備・点検を継続的に行う。コロナ禍中に得た、教育のオンライン展開などで積み重ねた経験とリソースを活かし、ポストコロナでさらに教育効果の高い、未来的な授業展開、メソッドの開発を目指す。学部の意見を伺いながら附属のアドバンテージとなる、あるいは学部教育にシームレスに接続できるような授業展開を検討する。また、地域連携（貢献）・企業連携・国際交流・研修活動・各種コンテスト参加など多様なプログラムで、本庄学院教育の可能性を広げ、入学した資質の高い生徒の能力や知的好奇心を育成する。
- ・ **ミスマッチのない学部進学と将来設計を目指して**
従来の進路指導のあり方を改め、大学生活や将来を総合的に考えた上で、学部選択・留学・就職を考えられるような進路指導を目指す。学部との教育活動の連携や情報交換を進め、学部説明会のあり方を検討します。キャリア教育同窓会や校友会との有機的な連携も作り、発展させる。日本医科大学への学校推薦制度について、高等学院、早稲田実業とも連携のうえ、キャンパスツアーや医学系の模擬講義等を充実させる。

- ・ **卒業論文を軸とした論文リテラシー教育の充実**
新カリキュラム導入に際し、論文リテラシー教育をうまく組み込む努力を行うとともに、どの分野の論文でも必要となるであろう統計処理やデータサイエンスに関するコンテンツを導入する。
- ・ **高等学院との有機的な連携と附属生としてのアイデンティティ育成**
高等学院との、今までの連携プログラムを成長させるとともに、新たな協働連携プログラムの検討も進め、附属校生としてのアイデンティティ育成にもつなげる。

(ウ) 国際関連

- ・ **留学の促進**
1 年間留学をしても高校 3 年間で卒業できる「第 2 種留学」制度や、Education New Zealand (ENZ) との留学協定を活かし、本学院から海外に羽ばたく生徒の増加をめざす。特に ENZ では個人の目的に沿ったフレキシブルな留学内容がカスタマイズできることが魅力で、その効果が期待される。
- ・ **受入留学生へのプログラム充実**
本学院で受け入れる留学生についても留学中の教育プログラムの充実を検討し、留学生のみならず本校生徒にとっても得るものが多いような形態を目指す。
- ・ **ポスト SSH・SGH のプログラム**
本学院には、長い SSH・SGH 期間中に培われた経験と国内・海外校とのネットワークがあり、SGH 後も国際プログラムをどう継承させていくかの検討を継続する。これまで実施してきた Mahidol Wittayanusorn School (タイ)、National Junior College (シンガポール)、Hana Academy Seoul (韓国)、蘇州中学 (中国) との生徒訪問・受け入れの交流については、コロナ禍で一旦オンライン化あるいは停止されたが、対面での再開に向けて努力する。これらの学校との連携については、国際シンポジウムの開催等を含め、未来的な国際交流のスタンダードとなるようなプログラムを双方で検討したいと考えている。

10.2 2021 年度学校評価関係者評価会記録

10.2.1 概要

日時：令和 4 年（2022 年）5 月 21 日 15:00～17:00

場所：本庄高等学院大会議室

参加者：

評価委員（五十音順、敬称略）

- ・ 黒岩智絵子 （草津町教育委員会）
- ・ 鈴木啓太 （本庄プロジェクト推進室室長）
- ・ 小林清木 （花咲徳栄高校 元校長）
- ・ 高橋信介 （2020 年度 保護者の会会長）

本庄高等学院

- ・ 半田 亨 （教諭、学院長）
- ・ 影森 徹 （教諭、教務担当教務主任）
- ・ 首村 努 （事務職員、事務長）
- ・ 川村悠太 （事務職員）

10.2.2 関係者評価

【実施方法】

- ・学校自己評価報告書については委員に事前配布し、ご一読いただいた。
- ・最初に影森より、本学院がどのような学校かについて学院パンフレットを使用し、20分程度委員の方々に紹介した（紹介内容については割愛）。これについての質疑はなかった。
- ・次に影森より、本学院の学校評価の概要について説明した。そのうえで質疑応答をおこなった

※ 紙面の都合上、本議事録には学院からの概要の説明は記載せず、質疑応答に関してのみ記載する。

0. コロナ禍における 2021 年度学校運営

【学院の感染症対策に対する保護者の反応について】

半田より高橋委員に、昨年まで在学中であった保護者としての意見を伺ったところ「学院のコロナ対応に関する保護者の反応は両極端で、保護者の会としての見解を一致させることは難しかった。しかしながら保護者会執行部ではあくまでも安全第一を優先する学院の判断にゆだねる方針であった」という回答であった。また本庄市内中学校の保護者会に関わっていた経験から、そうした混乱は市内の中学校においてもあったこと、おそらくどの教育機関も直面した問題であった、という意見であった。

【他教育機関での感染症対策について】

半田より黒岩委員に草津町のコロナ対策を伺ったところ「草津では PCR・抗原検査キットを草津町で保管しており、小中学校の児童生徒の中で新型コロナ感染症の陽性者が出たとき該当する学年や学級の児童生徒に教育委員会経由で配布している。それにより感染状況を数値で表すことができ、客観的な情報として保護者に伝えることが可能であった」という話をいただいた。また保護者との関係性については「保護者はある程度学校に任せる姿勢を持つべきであった」との意見であった。

1. 教育活動

【コロナ禍による学校行事の中止について】

高橋委員より「コロナ禍による学校行事の中止が相次いだことで、学校行事における生徒の伝統が失われつつあるが、そこについてはどう考えているのか。復活させるつもりなのか、致し方なしという見解なのか。」という質問があった。これに対して半田は「応援歌（紺碧の空）を歌うとき、皆で肩を組みジャンプするなどの伝統は失われるかもしれないし、それは避けることができないものだと思う。しかしその失われたものの後に、新しい伝統ができていくと考えている。ただし、それが進化となるのかはわからない。」と回答した。また「これまで伝統とされてきたものが必ずしも好ましいものだけではないため、リセットされる可能性もある。」という見解も伝えた。高橋委員は「コロナ禍の中大学進学した子供は、新しいことへの挑戦が難しい学校生活に直面している。その中でも、サークルや授業で附属校の先輩と関わる時、そうした学校行事の伝統の話題から、学院生としてのつながりを感じることもある。そうしたつながりになる文化こそ今後の社会において重要だと思うので、今後も学院で生徒間での伝統の継続の動きがあると一保護者として嬉しい。」という意見であった。

また高橋委員、半田ともに「このコロナ禍で学校行事が停滞したことにより、生徒がリーダーシップを発揮できる機会が失われたことは、非常に残念なことである」という点で共通した。

4. 生徒進路

【日本医科大学への推薦について】

黒岩委員より「日本医科大学への推薦枠が開けたが、国立医学部への推薦が今後開くことがあるのか？」という質問があった。影森より「年によっては国立医学部の推薦入試に合格する生徒がいること」を説明した。これについて鈴木委員は「日本医科大学の推薦枠を確保した意義は、本庄高等学院だけでなく早稲田大学にとっても素晴らしいこと」と述べた。黒岩委員は「優秀な生

徒が集うからこそ、早稲田以外の環境があること・そこに触れることで、より生徒の能力が刺激されるのではないか」との意見であった。他の委員も「将来的には早稲田大学にない学部（薬学など）の道や海外への道がより開けると学院生の可能性が広がるのではないか」との考えを述べた。これに対して半田は日本医科大学が本学院を推薦対象校に選定した理由を説明し、本庄高等学院の現在の教育が評価されていることを説明した。黒岩委員は「高崎での教育機関の意識を変え、医学部の可能性もあることを植え付けていくことが重要ではないか。優秀な生徒をまず呼び込み、入学後に進路の幅があることが今後の必要になるのでは」との意見であった。

小林委員は「埼玉県北部や群馬県南部では、医学部に行きたいという生徒はいるが受け入れ先がないことが伝統的に問題であった。自分が教育機関に勤めていた時、埼玉県北部地区に受け入れ先を作ってほしいという懇願を受けたこともある。医学部を目指す生徒の育成は県全体の問題である。これは募集時の問題、入学時の意識づけの問題であると考えている。今後、日本医科大学との連携をすすめ、広報含め大学全体としての医学部進学戦略をもってほしい。それにより北関東にある医学部へのニーズをしっかりと引き出してほしい」という感想を述べた。

またこの問題に関連し小林委員は「群馬県に近い埼玉県北部の学校でありながら、全体的に群馬県からの入学者が少ないことは問題である」という意見であった。これに対しては半田、影森ともに「ここ数年の群馬県合格者の少なさには危機感を抱いている」と同意見であった。

鈴木委員は「都内の場合の中高一貫が盛んであり、優秀な生徒（特に女子）は高校に流れてこない。また医学部への進学は、潜在的な志望者数が 12 万人以上、実際の受け入れ枠数 8000 とも言われる特殊な競争環境にある。そうしたなかで、本庄学院が医学部に特化したかのような戦略をとることには慎重を期すべきである」という意見であった。

【今後の教育・広報活動について】

小林委員より「中等部を作る計画はあるのか」という質問があった。これに対して半田が「その計画はない」と答えたところ「小中学受験を選択した層と、高校で受験を選択した層の性質は異なる。中学受験しなかった層には独特のユニークネスがあり、それを育てるという方針が（中高一貫ではない）高校にとっては重要である。こうした層の育成には本庄高等学院の全人的な教育方針は適切だと思う。そこに自負を持って、カリキュラムや（医科大学への推薦ができたことによる）進路の多様性を強調し、学院の存在を地域に根付かせていくという姿勢が必要である」という考えを述べた。これについて影森は「日本医科大学の推薦は昨年度卒業生から開始した制度である。本庄高等学院に医学部の道があること浸透させていくのはこれからだと考えている」と返答した。

7. 教育研究 施設

【生徒寮の食事について】

高橋委員より「自分の息子が通学しているとき早苗寮の食事が良くないという評判が自分の代であったが、改善されたか」という質問があった。影森委員より「今年についてはそうした意見はいただいていない。ただ梓寮（女子寮）については調理師が変更となったため、以前のようなスイーツの提供はなくなった」という回答をした。

※一食分の食費については梓寮、早苗寮とも同一だが、男子生徒、女子生徒の特長に応じて食事内容は異なっている。

8. 管理運営

【教員の働き方改革について】

黒岩委員より教員働き方改革について質問があった。半田は「部活動と委員会の校務分掌の整理から着手しているが、難航している。委員会の整理についてはある程度進んでいるが、部活動については教員ごとの見解の差が大きく調整が難しい。可能な限り、県が校正する部活動ガイドラインに従った運用に近づけたい」と説明した。

小林委員より生徒の下校時間、教員の勤務体系についての確認があった。そのうえで「学校現場は特殊な場所ではあるが、勤怠管理を一層丁寧におこなうことが働き改革においては重要となる。また教員はプライベートと校務が混同してしまうことが多いので、そこを切り離す工夫も

必要」という意見を述べた。「生徒と関わるという業務の性質上、どうしても時間外業務が生じること」が課題であることは委員・学院側の間での共通認識であった。

10.2.3 関係者評価会印象

今年度の関係者会議では、外部委員が事前に資料を読み込んでいただく時間を長く持つことを心掛けた。また、校長等で高校教育歴の長い小林委員のご協力を仰ぐことができ、例年になく積極的かつ忌憚のない意見を伺うことができた。

いただいた意見は今年度以降に活かしたいと考える。

11. 最後に

学校を構成する生徒・教職員・保護者にとって「良い学校」を作るためには、現状の良い点・悪い点を客観的に評価し、良い点を強化し、悪い点を謙虚に改めて行く姿勢が重要である。残念ながら、学校という社会は、一般企業と異なり、なかなか客観的な評価をすることが難しく、既存の在り方を継承してもなんとか事がなく過ごすことができてしまう。

しかし、世界的にグローバル化が進み、教育内容や生徒・保護者の意識が多様化する中、それでは学校としてはたち行かなくなってしまう。また、この間のコロナ禍では学校の底力が問われている。

ここに改めて、周囲の声に謙虚に耳を傾け、より良い学校づくりに活かしたいと思う所存である。

ご多忙中にもかかわらず長い本文をお読みいただき、ご意見をいただいた評価委員の方々にこの場を借りて、学校を代表し心よりお礼を申し上げます。ありがとうございました。